昭和47年10月29日発行通巻84号(毎日曜日発行) 昭和46年2月5日国鉄首都特別扱承認雑誌第516号

朝日＝ラルース

10/29
220円
84

週刊 世界動物百科



朝日新聞社

読者のみなさまへ

こんな動物が登場します　この〝百科〞は動物を機械的に50音順に並べたものではありません。系統だった分類に従い，次のような順序と冊数でお届けしております。概説（２），哺乳類（62），鳥類（64），爬虫・両生類（16），魚類（16），軟体動物・昆虫類・甲殻類・腔腸動物などの無脊椎動物（32）。現在，哺乳類が終了し，65号から鳥類が続々と登場しています。《１～128号の内容は表３参照》

総目次と総索引がつきます　見て，読んで，楽しむ〝百科〞としてだけでなく，引いて調べる〝事典〞としての機能を完全にするため，16冊ごとに総目次，64冊ごとに収録類別の索引をつけ，また最終の192号には詳細な総索引をつけます。

「私たちの仲間」のページ　第一線動物学者の執筆による解説と注があります。また〝動物週刊誌〞として，ニュースや話題，楽しい読物，ペット相談などを掲載しています。

ファイルで保存してください　全192冊を発行順に16冊ずつ，美しいファイル（定価600円）に，とじこんでください。堅牢豪華な〝動物百科事典〞全12巻がそろいます。なお，バックナンバーのお求めは，表３「本誌の購読について」をごらんください。

目次

世界動物百科　第84号

監修　黒田長久（日本鳥学会会頭）
翻訳　出水慈子（翻訳家）

凡　例

□本文中〔　〕を使ったものは，日本版のために付加した説明である。
□くわしい注釈が必要な語には，〔注１〕と番号を入れ，「私たちの仲間」第27ページに，同番号で記載した。なお末尾にページ数（上両端）を付記した。
□動物の種名は，原則として和名（一般に通用している外来語を含む），学名（イタリック）の順で表記した。和名の多い場合，併記しているものもあるが，専門家と協議し，編集部で決定した。和名のないものは，英語名または仏語名をカナ書きで入れ，原語（ローマン）を付記した。
□人名，地名は，本人または現地読みを原則としたが慣用の固定しているものは，それに従った。

◆日本迷鳥録◆　19

レンカク

Hydrophasians chirurgus



茨城県の涸沼は，サバンナシトドの項でも触れたが，もう一度，登場してもらわなければならない。1970年７月12日，この沼の西端，茨城町海老沢の休耕水田で，１羽の美しいレンカクが西野正義氏により発見されたからだ。

レンカクという鳥は，一見，バン・クイナ類を思わせるが，チドリ目チドリ亜目レンカク上科レンカク科に分類され，クイナ類とチドリ類の中間に位置する。世界じゅうの熱帯圏に分布し，７種を数える。すべて，異常に長いゆびとつめをもち，そのため，水面に浮かんだヒツジグサやオニバスなどの葉の上でも歩きまわることができる。日本に訪れたレンカクは，台湾を北限として，中国南部，マライ諸島，インドシナ半島，インドなどに分布し，全長は40センチを越えるが，半分以上は尾の長さである。黒褐色と白の配色で，後頸部に美しい橙黄色があり，翼角にとげ状突起をもつ。1955年７月７日，福岡県の水田で１羽捕獲されたのが日本での初記録である。■

文　内田康夫
え　木村しゅうじ

私たちの仲間
84号…10月29日

ニッポン列島探鳥記　6

野田サギ山の「終焉」を見守る人びと

国道122号線を新荒川大橋から北へ約10キロ、埼玉県浦和市内にはいると、道路のわきに「野田さぎ山」と書いた立札がある。矢印の方向に旧街道をたどると、「ドライブイン白さぎ」「白さぎ幼稚園」「白鷺霊園」等々、やたらと「白さぎ」の文字が目につく。それらの看板をかきわけながらしばらくいくと、左手の畑のなかに、展望台が見えてくる。これが世界的に知られたサギの集団営巣地、「野田サギ山」だ。

むかしは4万羽も営巣

「サギ山」と聞いて登山靴をはいて調査にきた学者もあったというが、山や丘陵があるわけではない。このあたりでは林のことを「山」と呼んでいるのだ。

かつてここには、4万羽のサギが営巣していた。人びとは街道を歩くとき、サギのふんをよけるために傘をかぶったという。いま、ここにはサギはまったくいない。展望台入り口の鉄の扉は鎖で厳重に閉じられ、入場券売場の小屋のなかには、うっすらとほこりがたまっている。

サギの減少が問題になりはじめたのは、7、8年前のことだった。サギ山の管理者である浦和市は、1967年から実態調査を開始したが、これは1966年にサギが前年の半数に大激減をしたためだった。その後、植林をして生息環境を整えたり、周囲の柵を強化して人が近づかないようにするなどの手を打ってきたが、サギはさらに減少した。

1969年には、5種のサギのうちアマサギは、まったく営巣しなかった。70年に確認されたのは全部で396巣、71年には210巣、そしてことしは、ついに1羽も営巣しなかったのである。

4月はじめ、50羽ほどのサギが野田を訪れたが、巣づくりをせぬままいずれかに去った。4月14日、3キロほど離れた三室山崎に、500羽ほどのサギが新しいサギ山をつくっているのが発見された。野田サギ山が移転したのだ、といわれた。だがこれで安心してしまうのは早い。

一般に「白さぎ」というのは白色のサギ類の総称で、「シラサギ」という種名の鳥はない。日本で観察されたサギ科の鳥は迷鳥まで含めると18種だが、そのうち5種が野田にきていた。チュウダイサギ（野田の人びとはダイサギと呼ぶ）、チュウサギ、コサギ、アマサギ、ゴイサギ（これは白くない）である。このうちコサギは留鳥で1年じゅうあまり移動せず、ゴイサギも一部が留鳥だが、あとの3種は冬になると遠くフィリピンあたりまで渡る。

三室新サギ山のサギは、85パーセントがコサギ、13パーセントがゴイサギ、それにごくわずかチュウダイサギとチュウサギが混じっているだけである。つまり三室のサギはそのほとんどが留鳥なのであり、それも昨年まで野田から200メートルほどのところにある本村山にいた留鳥群が移動したものらしい。この群れにことし渡ってきたごく少数の鳥が合流したのであろうか。

いずれにせよことしは野田にサギの姿はなく、「野田サギ山」は消滅した。

250年の「伝統」

とにかく由緒あるサギ山である。記録によれば、はじめて野田にサギが飛来したのは享保年間、つまり18世紀はじめのことだった。1776（安永5）年には10代将軍徳川家治が日光に社参する途中、サギ山は「上覧の栄を賜わった」。

江戸時代前期には、江戸から10里四方は禁猟区とされ、各地に「御鳥見役」が置かれていた。野田サギ山の場合は、とくに紀伊徳川家の「御囲鷺」として、昼はひとり、夜はふたりの番人を置いた。1847（弘化4）年には「代山村無宿勘次郎」なる者が36羽のサギを盗みとり、かごに入れて持ち歩いているところを差し押さえられた、という記録が、御鳥見役であった会田家の文書に残っている。

1938（昭和13）年にはサギ山は天然記念物に指定されたが、とくに保護対策がとられたわけではない。第二次大戦中、本土空襲が始まると、サギ山は白くて目だつので、爆撃の目標になるといわれて迫害されたり、食糧事情の悪化とともに、食用にも供された。占領軍はスポーツとして鳥を撃つことを楽しんだ。サギは減少し、サギ山も野田の5軒の農家の庭だけにせばまってしまった。

1952年、「野田のサギ及びその繁殖地」は特別天然記念物に指定された。57年から58年にかけてが、サギ山の最盛期で、木という木はすべて白い花が咲いたように、サギで埋めつくされたという。

1960年には、高さ25メートルの展望台が建設された。鳥を驚かすことなく巣を観察できる施設として、世界の鳥類学者から賞賛されたという。

しかしこのころから、水銀系の農薬が大規模に使われはじめ、周辺の都市化が進み、すぐわきを通る国道が舗装されて交通量が増加するなど、サギにとっての生息環境の悪化が著しくなった。1966年には周辺の竹林が枯死したこともあいまって、サギは激減した。その後は坂をすべるように、サギの数は年ごとに減ってきた。

サギはふつう、集団営巣地を毎年少しずつ移動する鳥なのだという。それが野田に限って250年も同じ場所に営巣していたのは、自然環境がよかったこともあるが、人びとが大事に見守ってきたことが重要な原因である。東京から電車で1時間足らずの浦和市内に、大きな集団営巣地が昨年まで続いていたのは、まさに多くの人びとの善意があったからだ。事実、野田のサギは、あまり人を恐れなかった。たいせつにしたから、人を信頼したのだろうか。そのなかでもとくにサギを愛した何人かの人びとの横顔を紹介しよう。

鷺山愛護会，厚沢さんの場合

もと美園村村長，厚沢八郎さんは，80歳を越えてなおかくしゃくとしている。1953年以来20年にわたり鷺山愛護会会長として活躍，いまは野田サギ山を見わたす赤屋根の2階屋で，悠々として暮らしている。

「みんな，ほんとうにさみしがってますよ。あんなにいたサギがいなくなっちゃったんだからね。もう，ここにはサギ山がございました，という記念碑でも建て



天然記念物の標柱


巣から落ちて死んだサギ。ことしはこうして100羽以上が死んだといわれているのです。

ようかといってるくらいで……」

「ここいらでは何百年もサギを保護してきた。一種の誇りをもってね。稲作に多少害があっても愛護してきた。ほかでは田を荒らすといって撃ち殺したりするそうだけど，サギには罪はないんだ。知らないからね」

サギの写真や標本に囲まれて，厚沢さんは悲しそうである。なおサギのために少し弁護しておくと，サギは稲作に有害なザリガニをたくさん食べるので，むしろ稲作に有益な鳥なのである。

「せめて大型トラックの規制でもしてくれたらね。この街道なんて，むかしは幅3間半，たまにウマに引かせた運送車が通るくらいだった。今はすごいですね。ひっきりなしに車が通る」

「はるばる南洋からやってきて，こっちで農薬にやられるなんてねえ。口からよだれをたらして倒れるんですよ。片親でも子は育つんだが，両親ともやられると，子どもは餓死する。一家が全滅しちゃうんだね。ＰＣＢなんて，生き物が参っちゃうくらいだから，人間にも影響しないはずはないんですがね」

「サギにはボスがいるらしいんだね。ここいらへ巣をつくろうじゃないか，というんでやってくる。ボスにきらわれちゃおしまいだよ。でも，大部分は野田で生まれた鳥なんです。古巣を忘れていなけりゃ，またもどってくれると思うんですがね。もとのサギ山がさみしがってるから，いってやろうじゃないかと……」

写真家，田中さんの場合

田中徳太郎さんは，白サギに魅せられた写真家である。国鉄に24年間勤務した後，写真店を経営しながらサギばかりを撮りつづけて18年になる。「野田サギ山」の名を世界に広めたのは，田中さんの写真だった。

1956年『カメラ』誌（スイス），『ライフ』誌（アメリカ）に作品紹介。60年フランス文部大臣賞。61年日本写真家協会年度賞。62年ヨハネスブルグ写真協会特別賞。などなど，賞を数えあげるだけでページが埋まってしまう。

「自分でもなぜこんな写真が撮れたか不思議なんですよ。もっと自然のなかにはいろうという心。弱いものを守ってあげようという心。きれいだな，この鳥が世のなかにいなくなったらどうだろうか，という気持。わたしの写真は，いわば授かった写真なんですね」

18年前，まだ有名ではなかった野田サギ山を訪れた田中さんは，サギ山の将来に一抹の不安を抱いた。

「要するに，村の人は無関心なんですね。鳥がいるのがあたりまえだと思っている。でも子どもたちのうちには空気銃でサギを撃ったりするものもいた」

サギ山が有名になれば，人びとはもっと鳥を大事にするだろう。もっと多くの人びとがサギの美しさを知れば，鳥は守られるだろう。そう考えた田中さんは，サギの写真を撮るかたわら，村議会で演説し，国へのサギ山維持予算要求の署名集めに歩いた。サギ山は有名になり，わずか年に５万円だが国から金も出ることになった。大ぜいのカメラマンが野田に集まり，望遠レンズの砲列をしくようになった。

「わたしはせっかくここまで写させてもらったのだから，今度は多くの人びとに写真を見せて歩くのが使命ではないかと考えるようになった。わたしは写真家だから，写真であの鳥につくすんだ，と」

田中さんは，各地で個展を開いた。白サギの写真の前に，立ちつくす人がいた。声をあげて泣く人があった。田中さんの作品は確かに，見る人に何かを伝えたのである。しかしそのうちにも，野田サギ山は荒廃していった。

「サギがいなくなるなんて，悲しくて悲しくてね。あの美しい鳥が犠牲になって，わたしたち人間に知らせてくれた。今度は人間の番ですよね」

田中さんはいま，地元で最後の写真展を開く準備をしている。また野田にサギ山の記念碑と記念館を建て，それを中心に若い人びとのための緑地帯をつくることに，新たな情熱を燃やしているのである。

浦和高校，小杉先生の場合

埼玉県立浦和高校で生物学を担当する小杉昭光先生は，1954年からサギ山の生態学上の調査を続けてきた。長期にわたる先生のデータは，野田サギ山については唯一のものであり，このルポを書くにあたっても，大いに活用させていただいたものである。

サギには種によって昼行性のものと夜行性のものがあるので，小杉先生は巣の数によってサギの数を確認する方法をとった。この調査によれば，昨年までの７年間に野田にくる個体数は，10分の１になったという。

放課後の研究室を訪ねると，先生はまだ生徒の質問に答えて，隣の教室で授業を続けていた。部屋にもどると，先生はわたしがノートをとる速さに合わせて，ちょうど授業の１コマ分，つまり50分間，サギの減少について語った。

「減少の理由ですけれども，まず最初に農薬中毒があげられる。死んだ鳥の肝臓から，16.9ppm の水銀が検出されています。水田で魚やザリガニを大量にとって食べるので，農薬の慢性中毒になるのですね。すると死亡率が高まるのはもちろん，産卵率も低下する。64年には平均１巣に4.2卵だったのが，69年には平均2.2卵になっている。これが全部育つわけではありませんから，親の代より数が少なくなってしまうのです」

小杉先生はいくつかの表やグラフを示しながら，説明する。

「周辺の都市化ということもあります。すぐわきの国道を通過する車が，昨年暮れの調べで15分間に130台，ちょうどサギ山の手前でカーブしているもので，夜にはヘッドライトがまともに巣を照らしてしまう。近所に家がふえて，それも近代的な明るい照明をつけますから，鳥が落ちつかない。サギ山で生活してはいるけれども，巣づくりをしない鳥がふえています」

「それにサギ山を訪れる人がふえたこともあるのですが……」

ここで先生は声を強める。

「カメラマンのなかには，石を投げて鳥が飛びたったところを撮る人がいるのですね。そうでなくとも，柵を越えて巣のすぐそばまで，入れかわりたちかわりやってくる。驚いた鳥があばれて卵やひなが巣から落ちると，親はもう世話をしませんから，確実に死んでしまう」

先生の話はあくまで理づめ，実証的だ。正確なデータをもとに生態系理論が展開されるとき，自然保護の訴えは大いに説得力をもって迫ってくる。

教育委員会，青木さんの場合

特別天然記念物とはいっても，国は若干の補助金を出すだけで，実際にサギ山を管理しているのは浦和市である。市の教育委員会文化財保護係長，青木義脩さんは，実務責任者ということになる。国と県と市からの出資を合わせても年間30万円足らず，という予算をやりくりして，まさに東奔西走してサギ山を維持してきたのが，青木さんだった。

「野田サギ山が特別天然記念物に指定されたのは，歴史的な背景と，５軒の農家の生活のなかにとけこんでいる，ということがあるのです。でも指定されているのは『野田のサギ及びその繁殖地』ですから，保護鳥でないゴイサギは，周辺の田ではとってもよいことになっていたり……」

サギの減少をなんとか食いとめようと心をくだく青木さんは，いわゆる「お役所仕事」に翻弄される。

「水銀系農薬の影響が大きいですね。群れで田にはいるので群れでやられる。この農薬がいちばん盛んに使われたのは，



野田のケージに「入院」中のサギ。金網越しに見る鳥はやはりなにか精彩を欠いているのです。



道路がサギ山の手前でカーブするので，ヘッドライトがまともに照らしてしまうのです。



三室新サギ山の夕暮れ。
空を埋めて乱舞する
サギの姿は
もうどこにも
見られなくなったのです。

1965年ごろです。今では使われていないことになっていますけれども，どういう農薬をだれがいつどこで使ったか，われわれには全然調べる手段がないのですね」

野田サギ山が空家になった現状で，今後のサギ保護をどう進めていくか。青木さんは次のように語った。

「野田については，植えた木やタケがのびてよい状態になっていますから，いずれ鳥がもどるのではないかと思います。また三室については，国の天然記念物指定はまず望めませんから，当面市で保護します。とにかく来年4月にどうなるか，ようすを見るしかないですね」

サギの保護を熱心に訴えてまわる青木さんを，5代将軍徳川綱吉の「生類憐れみの令」にひっかけて「犬将軍」と呼ぶ人たちがいるという。

「今日も県庁にいってきたんですが，犬将軍といわれましてね。でも動物のすめる環境は人間の住める環境ということなのですから，大事にしなくては。刀を持って振りまわす者がいるのに，こちらは傷の手当をするだけなんですからね。光化学スモッグだってそうでしょう。きょうはあぶないぞ，やられるぞ，といっているうちに，そのとおりになってしまうんですから……」

青木さんは早口でまくしたてた。静かな怒りがわきあがってくるようだった。

音楽家，武中さんの場合

三室の新サギ山は，浦和から岩槻に向かうバス通りのすぐわきにある。裏側を見沼用水という農業用水路にはばまれたごく狭い地域である。

「サギがくる前は，気味悪がって人がめったにはいらないような林だったんですよ」

新サギ山の入り口に居を構える音楽家，武中尚さんは，憤慨してこう話した。

「それが，サギが有名になってから人がたくさんくるようになって……。ゴールデンウイークはとくにひどかったですよ。狭い林に人が大ぜいはいりこんで，卵を持っていったり，手の届くところにある巣をこわしたり……」

野次馬やアマチュアカメラマンばかりではなく，某放送局や某研究団体も，鳥を追いたてて写真を撮ったり，抱卵中で神経質になっている鳥の巣の真下で長時間の「調査」を続けたという。市の教育委員会は道路側に有刺鉄線を張り，林の入り口は柵で封鎖した。

それでも毎日のように，巣から落ちる鳥が絶えなかった。最近は低毒性の農薬しか使っていないというが，それでも5月から6月にかけて水田に大量の農薬がまかれると，サギは次々と中毒になり，地上でもがき苦しみながら死んでいった。

「8月にはいってから落ちる鳥はほとんどなくなりましたけれども，今までに全部で120から130羽くらい落ちたんじゃないですか。ひどいときには1日に何羽となく落ちて死に，埋める所がなくなったくらいですよ。夜になっても鳥が心配で，寝ていられなかったですね」

市は武中さんが助けた鳥を野田のケージに運んでえさをやり，元気になったらまた放してやることにした。それでも再び元気になって飛んでいった鳥は少なく，半数以上はケージの中で死んだ。

「不思議なことに，サギが水田に落ちて死んだという話は聞かないですね。最後の力をふりしぼって，巣にもどってから死ぬんですね」

5時を過ぎると，水田でえさをあさっていたサギが，新サギ山に帰ってきた。10羽ほどの群れで帰ってくると，しばらく上空で舞い，それから急降下して木にとまる。ひとつ，またひとつと，群れがもどってくる。団地前の広場に，帰宅するサラリーマンをのせたバスが到着するように。かれらのマイホームは，いつまで続くだろうか。

サギ山は復活するか

浦和の駅からは今でも，「鷺山」行きのバスが毎日6往復出ている。ときには外人観光客がバスを仕立ててやってくるし，休日にはかつてのにぎわいにははるかに及ばないが，長いレンズと三脚をかついだカメラマンが，野田を訪れる。しかしサギはまったく姿を見せない。

サギ山の入り口にあるケージには，「入院」中のサギが数羽，見せ物にされている。飛翔するサギを見ることのできなかったカメラマンたちは，ケージのサギをねらう。もともと臆病なサギが，狭いケージの向こう側にぴったりと身を寄せ，うらめしそうな目でレンズを見上げるのが痛々しい。

3年前に野田で死んだ鳥から16.9ppmの水銀が検出されたが，ことしは三室で死んだ鳥からなんと130ppmのPCBが出た。こんなにも汚染されている自然環境のなかでは，250年にわたる人びとの善意は，踏みにじられてしまったのである。

都市化の波に抗して，ともかく昨年まで野田サギ山を維持してきた，有名無名の多くの人びとは，サギ山の「利用」をめぐって争ったりはしなかった。役所や研究団体によく協力しながら，それらの権威を振りまわすこともなかった。愛護会に参加したとたんに「自然保護」のエキスパートになったかのような態度をとることもなかった。

それでも野田サギ山は消滅した。三室新サギ山の維持も，困難をきわめるだろう。問題はすでに「地元有志」の意志の枠を越えている。それはまさに行政の問題であり，社会教育の問題なのだ。

8月24日，浦和市教委はサギ山問題の懇談会を開いた。ここでは三室新サギ山の巣は120と報告され，昨年の野田の巣が210であったのにくらべ半減してはいるが，ともかく全滅をまぬがれた，という結論が出た。来年はまた野田にもどる可能性もあるので，ともかく来春にサギがどこに集まるかによって，今後の保護の方針を決めるのだという。

しかし，三室新サギ山は野田にきていたサギが疎開してできたものだと単純にいえるものでないことは，前に述べたとおりだ。またいったん空家になったサギ山に鳥がもどった例は，きわめてまれである。さらに重要なことは，今までにわかっているサギの減少の諸原因に対して，積極的にこれを除去する対策はまだなんらとられていないのである。

周辺の環境破壊がさらに急速に進行しているなかで，鳥のいる一画だけに柵をめぐらせたところで意味はない。そのことはまた，今までの「天然記念物」のあり方そのものが，根本的に再検討されねばならなくなっていることを示している。

サギの渡りを見た人は少ない。春3月にいつのまにかサギ山に鳥が集まり，8～10月にまたいつのまにか姿を消すのだという。本誌が街に出るころには，三室新サギ山もひっそりとしているに違いない。来年また，サギはやってくるだろうか。野田サギ山は復活するだろうか。■

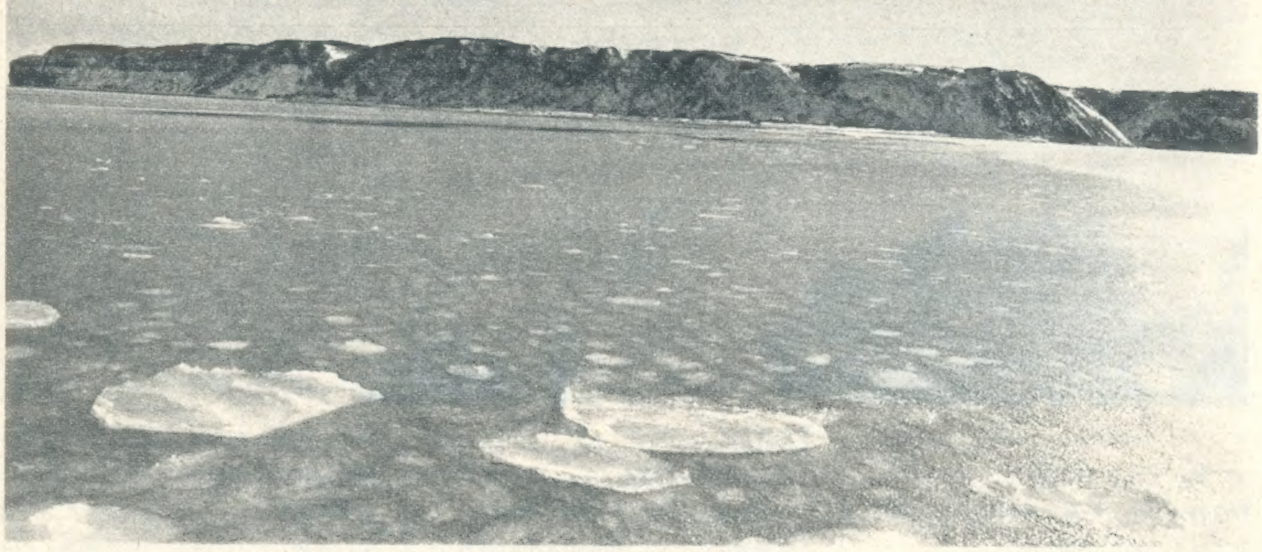
（大内記者）



武中さんにえさをもらう巣落ちびな。だれも教えてくれないので，まだ飛び方がわからないのです。

ヒグマと2人のイノシシ 80 畑 正憲

雪の島から 2



ヒグマと2人のイノシシからヒグマと人間たち――と畑さんの《夢》は酷寒の無人島から大きく広がる。
撮影 畑 三喜雄

これから僕とどんべえがどうなっていくのか、まったく自分でも予測がつき兼ねるけれども、10億円とまで贅沢は言わない、せめて3億円あればと思う。それだけあれば、山をひとつ囲うことが出来るのだ。そこで半野性化したヒグマと暮らしてみたい。

変だね。おかしいな。次から次へ夢想が発展していって、確かなものへと変わっていく。

結局、おれはやるだろう。もし健康でさえあれば、実現するな、きっと。そのことは自分が一番よく知っているつもりだ。最終的な形は予言出来ないが、ま、期待していてくれ。

夜も更けた。

この手紙を書いている今、月が裏山のへりで凍っている。月光が雪の上で踊っていて、ランプが不要なほど明るい。

今夜は冷えこみが厳しそうだ。きっと対岸まで凍り始めているのだろう、水鳥の声が聞こえない。いつもならもの哀しいなき声が絶えないのだが……。

犬は全員家の中だ。外の犬小屋に寝せてもいいのだが、こんな晩はこちらの方がもの寂しくて、さっきまで大騒ぎさ。

さっきの話に戻るが、動物の飼い方にはこれといった妙薬があるわけではないと思うよ。広い自然の中で飼うもよし、狭い檻の中で飼うもよし、まったく自由だ。こうでなければならぬと、自分の意見を他人に押し付けることはない。

家の中でライオンを飼ったって、それはそれなりの面白さがある。野外では味わえぬ複雑な交流があり、きっとたのしいと思うよ。

これまでおれ、さまざまな動物を手元に置いてきた。そのひとつひとつが、わが家の生活に入りこみ、ごっちゃになっておかしかった。適当な発見もあるし。

やってみないでアレコレ言うのはやめなければね。

それでどんべえだが、僕はずっとつき合いをやめはしない。彼女は僕と共にいるだろうよ。

でも現在続けている報告は、区切りのいい所でしめくくろうと思うようになった。冬眠明け辺りで。

理由はいろいろある。

そのひとつは物語のスタイルを変えたいことだし、この1年間、僕の中に貯まったわだかまりを消化してからにしたいからだ。

ヒグマについても、もっとよく知りたいしね。はっきり言えば、日本にはヒグマ学はないも同然だった。

その点では君に迷惑をかけた。送っていただいた論文などなど、大変に参考になった。けれども君が嘆いている通り、「知的好奇心をしびれさせる」ものはなかったね。

僕はこれから、本格的にヒグマと取り組もうと決心した。

学問にも手を出す。自分では出来ないにしても、若い学者を育てるつもりだ。

日本だけじゃない。世界中のヒグマの情報が欲しいし、そのために世界の各地へ飛ぼうと思う。連絡もつき、その手筈はすべて整えた。

だから僕の『どんべえ物語』は2冊で中断することになる。今後いつ筆をとるかわからぬが、どんべえの子を取り上げたところが新しい物語の書き出しになるかもしれない。

――ヒグマと2人のイノシシ

という題もすでに適当でなくなっている。最初は妻と2人だけで出発したのだが、ヒゲ夫妻が合流し、春からはうら若い女性が2人参加する。青年の参加も予定している。

いつの間にか、チームと呼ぶにふさわしい姿になってきた。そのうち、1頭だけではなく、ヒグマの仲間も殖えることだろう。

――ヒグマと人間たち

そう呼ばねばならない。

もしくわしく調べられているのだったら、なぞる部分も多くて、同時進行の記録が書きやすい意味がある。けれども、これからの進行は、わがチーム内だけのひそかな愉しみにして、しばらく沈黙を守るつもりだ。

自慢していいかな。『どんべえ物語』は、これはこれで意味があったと思っている。

しかし、これはほんのプロローグだ。ヒグマについての僕たちのアタックは、これからだと承知して欲しい。

交配、出産、育児、母と子……。

ドラマの展開はこれからだ。

ヒゲは自信に満ちてこう言っている。

「どんべえだったら、子を産む瞬間や育児のようすを見せてくれるさ。うまくいけば、お産の手伝いが出来るかもしれないぜ」

そうなればどんなにかいいだろう。

君、信じられるか。

雪の島で空想していると、将来のさまざまな場面が浮かんでくる。

やさしい花が咲き乱れる斜面を子グマが駆け下りてきて、足にまといつく。どんべえはというと、日向でうっそりしていて、それでいて子供の行方が心配でならず、ときどきチラリとこちらを見る。

可能だろうか。

そうなるものだろうか。

広い土地と経済的な支えさえあれば、可能だろうと思う。いずれにしても、僕は身をもって確かめるだろう。

家族がどれほどどんべえを信頼しているか、それは他人の想像をはるかに越えている。危険が強調され、事実各種の事故が起こっているにもかかわらず、毎日毎日夫とヒグマの格闘を眺めて暮らすには、信頼がなくてはやっていけない。もし彼女たちにヒグマが危険だという考えがあれば、正視してはおれないはずだ。

プロローグには情熱を。

次の作品には発酵した重厚さを加えてみたい。といっても、僕の仕事だから、それは願いだけであり、またまた紙をよごすだけの作品になるに違いない。が、この1年の経験を踏み台にして、少しでも高い所へ登れればと思う。

考えてみれば、重厚さなど僕には期待出来ないのかもしれない。僕は畢竟一介のロマンチストに過ぎないし、淡く詩的な短文を書く位が身分相応だとは自覚している。でも、やってみたいな。こちらの方も見果てぬ夢だ。

ああ、だらだら書いてしまった。グチやオーバーな決意とやらに退屈したことと思う。

我慢してくれ。無人島に住んでいるせいで、友だちに飢えているのだと解釈して……。

お願いがある。人の低温麻酔に関する論文、僕の頭では理解出来ない個所がある。なにか、総合的に解説した教科書のようなものはないだろうか。本屋をのぞいた時、もし発見したら送ってくれ。

電気生理は僕の専門……いや守備範囲だけど、最近の論文はよくわからない。発達し過ぎているし、機械類を実際にいじっていないし、もう読めやしない。

その点、学校にいなければならないということもよくわかる。研究室をのぞいたら、そして説明を聞けば、たちまちナットクするのだろうが、ね。フィールドワークと研究室はなかなか調和し難いし、だからといって放っておいて良いものでなし、それなら野山に研究室を作っちまえという僕の持論に戻ってしまう。

最後に、もし君の教え子のなかで、こいつは優秀だ、野に放ってみたいと思う人がいたら、紹介してくれないかな。話し合って折り合えば引き取るし、悪いようにはしないつもりだ。

長くなった。そろそろさよならをしよう。奥さんにくれぐれもよろしくお伝え下さい。

さよなら。■



コトドリ科　*Menuridae*

オーストラリアに生息するスズメ目の鳥の1グループ。長く美しい尾羽（おばね）を持つことで知られている。この尾羽は16本もあり，スズメ目のうちでもっとも多い。とくに雄の尾は華麗で，ちょうど竪琴のような形をしている。つまり，幅の広い外側の2本の尾羽が琴の支柱を，ほっそりした内側の14本が琴線を思わせるのだ。コトドリの名もここからきている。この尾羽の長さは60センチを越えることもあるが，からだそのものは小さく，35センチ以上になることはない。

コトドリ類の羽毛（うもう）は茶か灰色で，くびが長く，頭は小さい。あしは長くがんじょうで，つばさは短く，先端が丸くなっている。このからだつきからもわかるように，地上性の鳥で，めったに飛ぶことはない。じょうぶなあしで腐食土をひっかき，昆虫（こんちゅう）類やミミズ，甲殻類，軟体動物などをとって生活している。

この科は，コトドリ，アルバートコトドリ *Menura alberti* の2種からなっている。

コトドリ（雄）。コトドリ科コトドリ属。
いまや求愛のディスプレーは最高潮。
自慢の長い尾が裏返しになり
滝の白糸のようにキラキラ輝きながら
からだの上におおいかぶさっていく。（上）
PH. F. PARK-Z. F. A.



コトドリ科の分布。
コトドリとアルバートコトドリの2種からなり
いずれも，オーストラリア南東部の森林の
起伏に富んだ地面で暮らしている。





コトドリ *Menura superba*

コトドリはスズメ目のうちで，もっとも大きく，しかも，もっとも華麗な鳥で，オーストラリアの国鳥にもなっている。雄の全長は約95センチ（そのうち尾は約60センチ）もあり，雌でも78センチくらいになる。尾羽は16本あるが，雄では外側の２本は幅が広く，白地に褐色の横縞が浮かんでいて，先端が黒く，ちょうど竪琴の支柱のような形にのびている。中央の２本の尾羽には羽枝（うし）がなく，ほっそりとした羽軸（うじく）だけでできている。他の12本は，表面が褐色，下面が白で，それぞれの羽枝はたがいに離ればなれについており，繊細なレース状になっている。しかし，この華麗さは雄だけのことで，雌の尾羽は，それほど美しいわけではない。からだの羽毛は，雄が茶と灰色で，雌は全体に茶褐色をおびている。

オーストラリアの地上生活者

コトドリはオーストラリア南東部の海岸沿いの森林地帯に生息している。とくに，起伏に富んでいて，地面が腐食しかかった植物の厚い層でおおわれているような場所を好み，一生の大部分をその地上で暮らしている。飛ぶ力は弱く，つばさは岩の裂けめの奥底を探ったり，下枝から上枝にとび上がったりするとき以外にはめったに使わない。ふだんは森のなかを駆けめぐり，障害物を跳びこえ，絶壁をよじ登り，じょうぶなあしで地面をひっかき，昆虫類やクモ，ミミズ，甲殻類などをとって生活している。ただし，ねぐらは樹上である。

コトドリは極端に用心深く，しかも，野性的・攻撃的で，同種の鳥にも決して近寄らず，単独あるいはつがいで暮らしている。だから，とくに繁殖期に２羽の雄が出合ったりしようものなら，たちまちけんかが始まる。

華麗なプレーボーイ

秋（４～５月）の繁殖期になると，コトドリの雄は自分のテリトリー（なわ張り）内に土や葉を積みあげた直径１メートルほどの少し高くなった塚をいくつかつくる。この塚は，



その名のとおり
竪琴を思わせるような美しい尾。
もっとも，こんなふうに
尾羽を垂直に立てているコトドリの姿は
めったに見ることができない。（左上）

PH. J. WARHAM



いわば《踊り場》の役目をするもので，雄はこの上で大きな尾羽をひろげたり，尾羽を前方に倒して自分のからだの上におおいかぶせたりして，調子のよいさえずりを発しながら踊りまわる。この鳴き声は鋭くよく響くが，鳴き方は非常に多様だ。また，この鳥は（繁殖期にかぎらず）すばらしいものまねの才能を示し，種々の鳥，人の呼び声，ノコギリをひく音，イヌの吠え声，自動車のクラクションの音など，実にさまざまな音をまねる。

この奇妙な，そして華麗な求愛のディスプレーは，テリトリー内にあるいくつかの《踊り場》で，順次くりひろげられる。しかし，このディスプレーに魅せられた雌は，つがい形成のあと，すぐに見捨てられ，巣づくりから抱卵（ほうらん），育雛（いくすう）まですべてひとりで行なわなければならない。ここから，コトドリは一夫多妻制の繁殖様式をとっているともいわれている。いずれにしても，雄のコトドリは，その姿といい，行動といいまさに華麗なプレーボーイそのものといえるだろう。

年１回，１個の卵

巣は地上か，岩だなや木の下枝など，地面からほんのわずかの高さのところにつくられる。側面に入り口のついた山小屋のような形をしていて，外部は小枝や根をからみ合わせてあり，内部は繊維やコケ，羽毛などが敷かれている。

雌はこのなかに，年１回，鶏卵くらいの大きさの卵を１個だけ産む。殻は厚く，灰色で濃茶色の斑点がついている。抱卵は約40日間も続き，スズメ目の鳥では最長といわれる。ひなは６週間も巣のなかにいるが，太りすぎて，飛びたつようになる前に巣からころげ落ちることもある。雌雄とも成鳥になって最初の羽色は，雌のものと同じで，雌雄の違いは少なくとも２年後にしか現われない。

誘惑されて，棄てられて——。
雄の華麗なディスプレーに魅せられた
雌のコトドリは
そのあと，ひとりさびしく山小屋型の巣をつくり
卵をあたため，ひなを育てる。（左下）
PH. J. WARHAM

じょうぶなあし指で地面をひっかき
昆虫やミミズ，カタツムリなどのえさを
あさっているコトドリ（写真は雄）。
そばでおこぼれにあずかっている小鳥は
アンナイドリ *Pycnoptilus floccosus*。（上）
PH. J. BROWNLIE





ヤイロチョウ科　*Pittidae*

ヤイロチョウを漢字で書けば"八色鳥"。その名のとおり，ヤイロチョウ科は色とりどりの美しい羽毛に包まれたスズメ目の鳥の１グループだ。１属23種からなり，そのほとんどが東南アジア，オセアニアにいる。中央アフリカ，東アフリカにも２種が生息するが，いずれも単独性，地上性で，一生のほとんどを地上で過ごす。何種かは渡りをする。

この科の形態上の特徴は以下のとおりだ。

- 体長は15～28センチ。
- 頭部は大きめで，くびが短い。
- くちばしは強く，軽くカーブしている。
- 尾は短く，あるかないかわからないほど。
- あしは長く，じょうぶである。
- 羽色（うしょく）は多彩で，ふつうは雌雄同色だが，著しく異色のものもある。

ヤイロチョウ　*Pitta brachyura*

ヤイロチョウはこの科の代表的な種で，日本から南アジアの熱帯林に生息している。全長は約18センチ。背部は青緑色，頭部は灰褐色で，頭頂と過眼線が黒い。つばさは黒，青，緑，白からなり，腹部は全体にクリーム色をしているが，下尾筒から下腹にかけてはあざやかな緋色をしていて，ちょうど赤いふんどしをしめているように見える。そのため，南九州ではこの鳥を"赤だんな"〔"だんな"とは"ふんどし"の意〕と呼んでいる。

日本のものはインドのものより胸部が淡色で，夏鳥（なつどり）として渡来し，冬は南中国，ボルネオなどに渡る。ヤイロチョウは，そのはでな羽色や分布において，日本における熱帯アジア系の鳥を代表する種であり，日本がヤイロチョウ科の分布の北限ともなっている。日本での繁殖記録は高知県宿毛，長崎県雲仙，対馬が知られ，出現記録は，栃木，福井，秋田までである。

ヤイロチョウは小さい群れをつくっている

シマハラヤイロチョウ *Pitta guajana*の一亜種。
ヤイロチョウ科ヤイロチョウ属。
東部ジャワ，バリ島にすんでいる。
ずんぐりしたからだに，はでなアロハを着こんで
薄暗い熱帯林を跳びあるいている。（上左）
PH. A. VISAGE-JACANA

ムネアカヤイロチョウ *Pitta erythrogaster*。
ヤイロチョウ科ヤイロチョウ属。
フィリピンやニューギニアなどにすむ。
何はともあれ，八色鳥の名にふさわしい
この鮮烈な羽毛をとくとごらんください。（上右）
PH. W. LUMMER



ことも多いが，もともと単独性で，暗い原生林にすんでいる。性質は臆病で，ほんの少しでも危険を感じると，くさむらに逃げこんでしまう。主食はミミズと昆虫，とくに脈翅（みゃくし）類，甲虫類だが，漿果も食べる。ツグミ同様，えさはすべて地上で捜すが，夜になると木に止まって眠る。だから，巣も木のあまり高くないところにかけることになる。

巣は，かなり粗雑な編み方をした大きな球体で，側面に入り口がついている。巣材は細い茎や根，葉，植物繊維など。1腹の卵数は2～7（ふつうは4～6）個で，光沢をもった殻には，紫と褐色の斑点が散りばめられている。雄も抱卵に協力する。



ヤイロチョウ。ヤイロチョウ科ヤイロチョウ属。
赤いふんどし　向こうに隠し
かわいいひなに　えさ運び。
冬は中国　ボルネオに　暖を求めて　長い旅。
（高知県宿毛市にて）

撮影　高野伸二

ヤイロチョウ科の分布。
23種のほとんどは，東南アジア，インドネシア
マレーシア，オーストラリア北西部の森にすむが
中央アフリカ，東アフリカにもいる。
日本には，ヤイロチョウが夏鳥としてくる。





タイランチョウ科

Tyrannidae

タイランチョウ科は，約350種からなるスズメ目の1グループで，アメリカ大陸だけに分布し，カナダ北部から南アメリカのパタゴニアにかけて生息している．この科の鳥の形態上の特徴は次のとおりだ．

- 全長は8センチから40センチまであるが，たいていは15～22センチ．
- 羽毛は一般にじみ．ただし，数種は原色の羽毛をもっていて，頭部に冠羽（かんう）をもつものも多い．
- くちばしは，長い細毛で囲まれており，先端が鉤（かぎ）形になっているものも多い．
- あしは弱く，前の3本のゆびのうち2本は部分的に癒着（ゆちゃく）している．
- 多彩色の数種を除けば，雌雄二型は見られない．

この科の鳥はみな大胆で，攻撃的な性質をもっている。タイランチョウの名があるのもこのためだ．つまりこの名は，"専制君主""暴君"という意味の英語"タイラントtyrant"に由来しているのだ．

この攻撃的な性格にふさわしく，単独性で樹上にすんでいる．渡り鳥が多い．

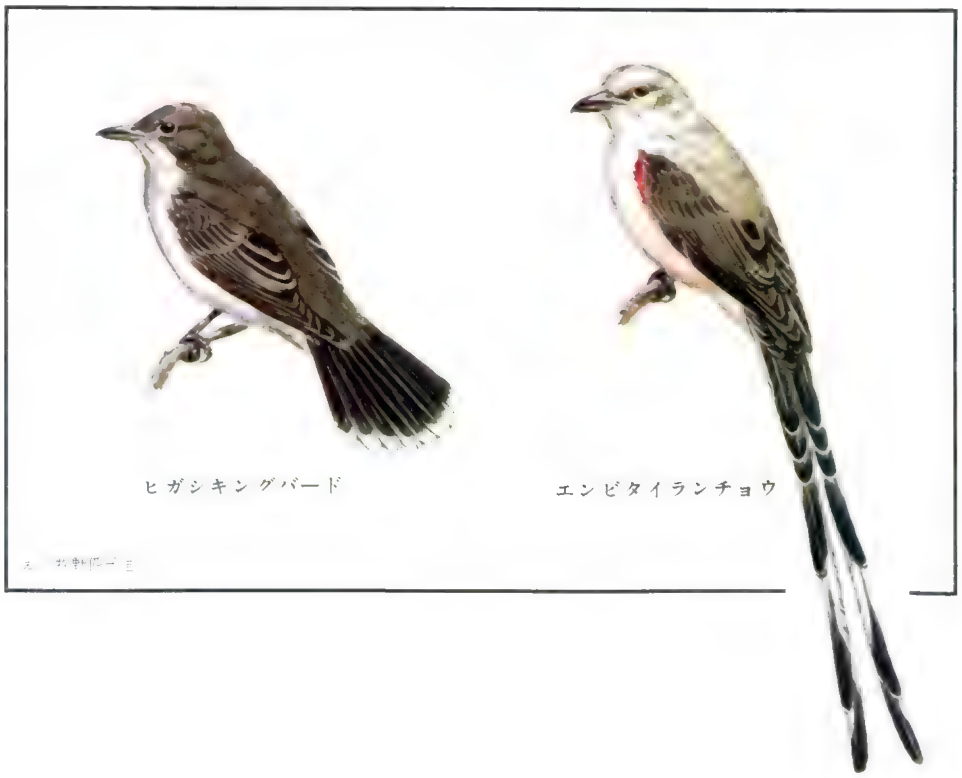
シュショクタイランチョウ *Pyrocephalus rubinus*
タイランチョウ科シュショクタイランチョウ属
テキサスからアルゼンチンにかけて分布する．
この科の鳥には珍しく，雄（右）は色あざやかだ．
雌[illegible]はやはりじみだ．[illegible]
PHOTO [illegible] JACANA [illegible] B. LEMMER [illegible]

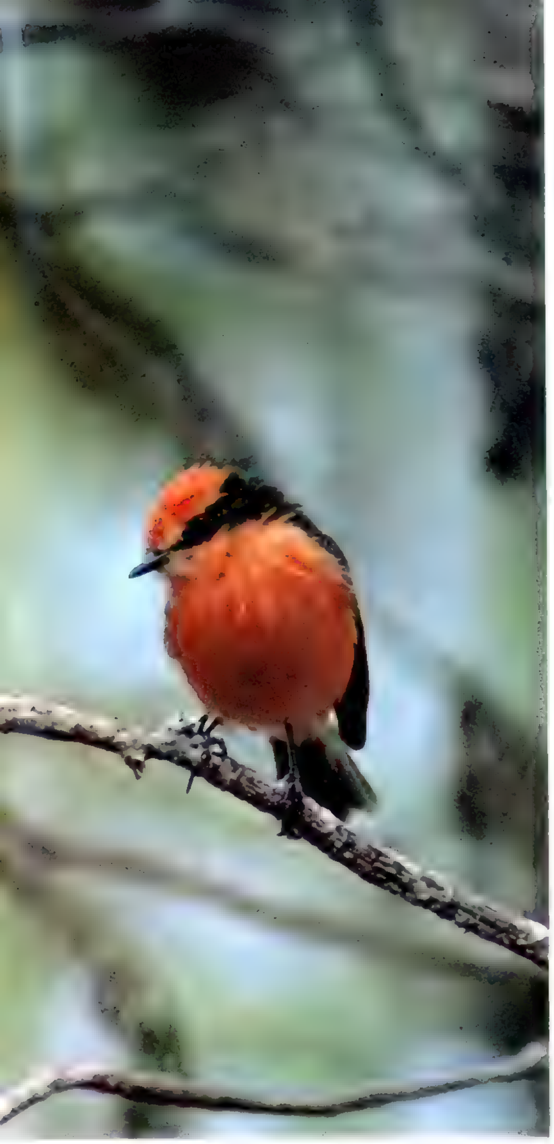
ヒガシキングバード

Tyrannus tyrannus

タイランチョウ科のうちでもキングバード類は，その形態，習性ともに，この科を代表するもので，北アメリカだけでも4種がある．ヒガシキングバードは，その学名もこの科を代表しており，尾の先が白いのが特徴だ．他の3種のうち，北アメリカ西部にすむニシキングバード *T. verticalis* は尾の外側が白く，ハイイロキングバード *T. dominicensis*（サウスカロライナ，フロリダから南アメリカにまで分布）やオリーブキングバード *T. melancholicus*（テキサスからアルゼンチンまで分布）は尾に白色がない．

ヒガシキングバードはオウサマタイランチョウともいい，全長約21センチ，背部は灰・褐色系のじみな色調で，腹部は白色，頭の上に，赤い羽毛の帯がある．





繁殖期がくると，雄は地上20～30センチの高さで空中ディスプレーをする。巣は雌雄が力を合わせ，水平な枝の上にかける。乾燥した細枝でできていて，底には，細い根やいろいろの動物の毛が敷きつめられている。

1腹の卵数は4～6個，茶褐色をおびた白い卵で，茶色の斑点が不規則についている。抱卵は雌が行ない，雄は，ありとあらゆる危険から雌を守ってやる。たとえば，猛禽類の姿を認めると，雄は，どんな遠くでもまっしぐらに向かっていき，相手の背中につめの一撃を加え，相手が退散する気配を示しても，くちばしで突きながら追いつづけ，完全に危険がなくなるまで離れようとはしない。

しかし，恐れを知らぬこの鳥も，ムラサキツバメ *Progne subis* とは相性が悪いようだ。体力でも速さでもまさるムラサキツバメは，ヒガシキングバードの攻撃をいつもかわしてしまう。オーデュボン（Audubon）によると，数年間ムラサキツバメが占領していた農家の中庭にヒガシキングバードが営巣（えいそう）し，雌が抱卵しはじめると，猛り狂ったムラサキツバメは，たくましい雄にけんかを吹っかけ，ついにたたき殺してしまったという。

アメリカ合衆国東・中央部に生息し，寒くなると中央アメリカ，南アメリカ北部などに渡っていく。タイランチョウ科の鳥は，ふつう夜に渡りをするが，この鳥は，昼間，グループごとに分散して旅をする。森林ではめったに見かけず，田園地帯や果樹園，道路沿い，川の土手などにいることが多い。

勇猛果敢の“小さな酋長”

この鳥はキングバードの名にふさわしい専制君主として君臨している。自分のテリトリーへの侵入を断じて許さず，カラスや小型のタカなどに対しても猛然と向かっていく。このため，インディアンからは“小さな酋長”と呼ばれており，アメリカ人の多くに愛されている。ただし，大胆すぎて，ハチにさされることも恐れずにハチの巣を荒らすため，養蜂業者からはきらわれている。

この鳥は，クローバ畑などのすぐ上をひらひら飛んでいたかと思うと，ふいに花の咲くくさむらに飛びこみ，地上から飛びたとうとしている昆虫をくちばしでぱくりと捕える。川面や湖上では，ツバメと同じように，飛びながら昆虫を捕え，水を飲む。水浴びのしかたもツバメと同じで，すばやくくちばしやからだの一部を水に浸し，岸べの枝の上でひと休みして，からだをブルブルッとふるわせながら羽毛をかわかす。

エンビタイランチョウ

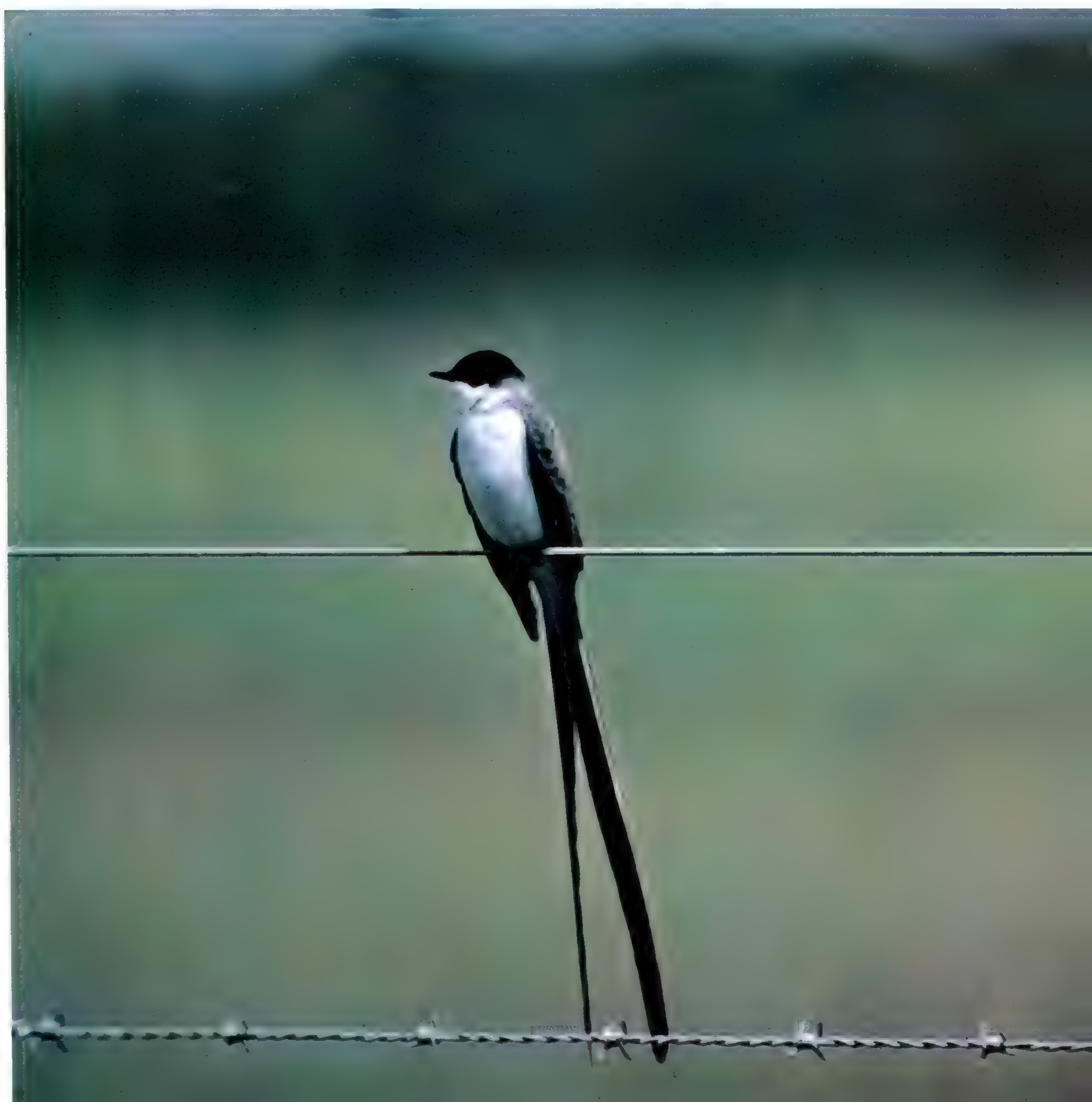
Muscivora forficata

エンビタイランチョウは，深く切れこんだ長い燕尾の目だつ鳥で，名まえの由来もここにある。全長は，もっとも大きいものでは37センチにもなる。頭と胸が灰色で，肩の部分は赤く，腹部はピンク色，尾とつばさは茶と黒の優美な鳥だ。アメリカ合衆国南部で繁殖し，冬はメキシコ南部やパナマに渡るが，この旅はおもに夜間に行なわれる。

この鳥の雄のディスプレーはちょっとした見ものだ。まず30メートルほどの高さまで舞いあがり，途中まで下降したあと，また少し舞いあがり，そして再び下降し，また少し上昇し……というぐあいに繰り返しながら徐々におりていくのだ。

巣は草，茎，細枝などを編んだじょうぶな椀型で，電柱の上やくさむら，小灌木のなかなどに置かれる。1腹の卵数は4～6個，茶と赤紫の斑点のついたクリーム色の卵だ。

おもなえさは昆虫類，とくにバッタや甲虫類だが，少しは木の実も食べる。



ズグロエンビタイランチョウ
タイランチョウ科エンビタイランチョウ属
学名は *Muscivora tyrannus*。
一見ツバメふう。でも，尾が長すぎるし
全長は40センチほどもあるのだ。（右）

PH F. FRIZE



マイコドリ科　*Pipridae*

マイコドリ科は、中央および南アメリカにすむスズメ目のグループで、次のような形態上の特徴をもっている

- 全長は8～16センチと小さい
- 雌雄によって羽毛（うもう）の色が異なり、多くの場合、雄のほうが色あざやかである
- くちばしは短く、基部が太くなっていて、飛びながら昆虫（こんちゅう）類を捕食するのにつごうがよい

この科は約60種の鳥からなり、すべてメキシコからパラグアイ、アルゼンチンにかけて生息している。どの鳥も留鳥（りゅうちょう）で、暑く湿気の多い熱帯林にすんでいる

繁殖期になると、マイコドリ類は小さな鳥にしては珍しく、すばらしい求愛の踊りをくりひろげる。マイコドリ（舞妓鳥）の名があるのもこのためで、雄は、雌をひきつけるために、つばさの羽毛で奇妙な音を出したり、騒々しく鳴いたりしながら一定の場所で踊り狂うのだ

シロクロマイコドリ

Manacus manacus

シロクロマイコドリは全長約12センチ。雄はくび、胸、のどのあたりが白く、腹から下尾筒にかけては灰色で、からだの上部と頭部は黒い，雌は全体に濃い緑色をしている　雌雄ともあしはオレンジ色だ。南アメリカのアンデス山脈東部に分布し、ベネズエラからアルゼンチンにかけての熱帯林のなかや、木のまばらな林の空地（あきち）にすんでいる

繁殖期でないとき、この鳥はカッ類と同じように、隊列を組んで自分のすんでいる地域を飛びまわり、えさを捜して時を過ごす　このえさは、果実や葉の茂みで捕える昆虫類が中心だ

つばさが音を出す！

この鳥は活気にあふれ、よく動きまわる鳥で、ふつうは地上から少しの高さのところを飛ぶ。飛ぶ距離は短くてすばやいが、そのときに、つばさの羽軸（うじく）がこすれあっ

オナガセアオマイコドリ *Chiroxiphia linearis*。
マイコドリ科セアオマイコドリ属。
長い尾がじゃまなのか、飛ぶのは苦手だが
つばさの羽毛をこすりあわせて
いろんな音をだすことができる。（上）
PH. A. VISAGE/JACANA

シマハラヤイロチョウの一亜種。
ヤイロチョウ科ヤイロチョウ属。
親の因果が子にたたり，生まれついてのこの姿。
あまりのはでさに気恥ずかしくてか
スマトラ，マラヤの熱帯林にひそんでいる。（右）
PH. W. TUMMER

ハゲノドスズドリ *Procnias nudicollis*。
カザリドリ科スズドリ属。
顔からのどにかけて裸出したブラジルの鳥。
鉄床をかなづちでたたくような鳴き声をだし
またの名をカジヤチョウともいう。（84—10
PH. W. TUMMER









ずんぐりしたからだ，短いつばさ，長いあし。どこからみても，飛ぶのは苦手に思えるヤイロチョウだが，これでも渡り鳥。それも，日本から南中国やボルネオまで何千キロもある道のりを渡っていくという。でも，ふだんは地上で生活している。

PH. RUSS KINNE



て奇妙な音を発する。これは，つばさのある部分の羽軸が非常に太くなっており，一方，羽弁（羽軸の両側についている羽枝，小羽枝のつらなり）が非常に狭く，こわばっているため，それらがこすれあって音を出すのである。これはマイコドリ科の鳥のすべてに共通する特徴となっている。この音は，人のつぶやきのような音から，手やむちでたたくような音，きしむような音，さらには鋭い汽笛音にいたるまで，さまざまな音色をもっている。

ところが，シロクロマイコドリをはじめ，これと近縁の種の鳴き声のほうは，極端に貧しいもので，数種の口笛のような声と簡単なさえずりしかできない。

シロクロマイコドリは，興奮するとのどをふくらませる習性がある。このとき，のどの部分の長い羽毛がさか立って，一種のあごひげのようになるため，ブラジルでは《修道士》というあだ名がつけられている。

繁殖期になると，雄たちはそれぞれ森のなかの地面に直径25～50センチの小さな円形の踊り場をしつらえる。この踊り場は，落葉や小枝がすべて取り除かれており，小さな垂直の若木だけが止まり木用に残してある。それぞれの踊り場はたがいに隣接しているが，おのおのの雄は，繁殖期の間じゅう，ずっと自分の小さな領分のなかにとどまっている。そして，毎朝，雌が近づいてくると，つばさに力をこめてブンブンふるわせながら，のどの羽毛をさか立て，求愛のディスプレーをくりひろげる。

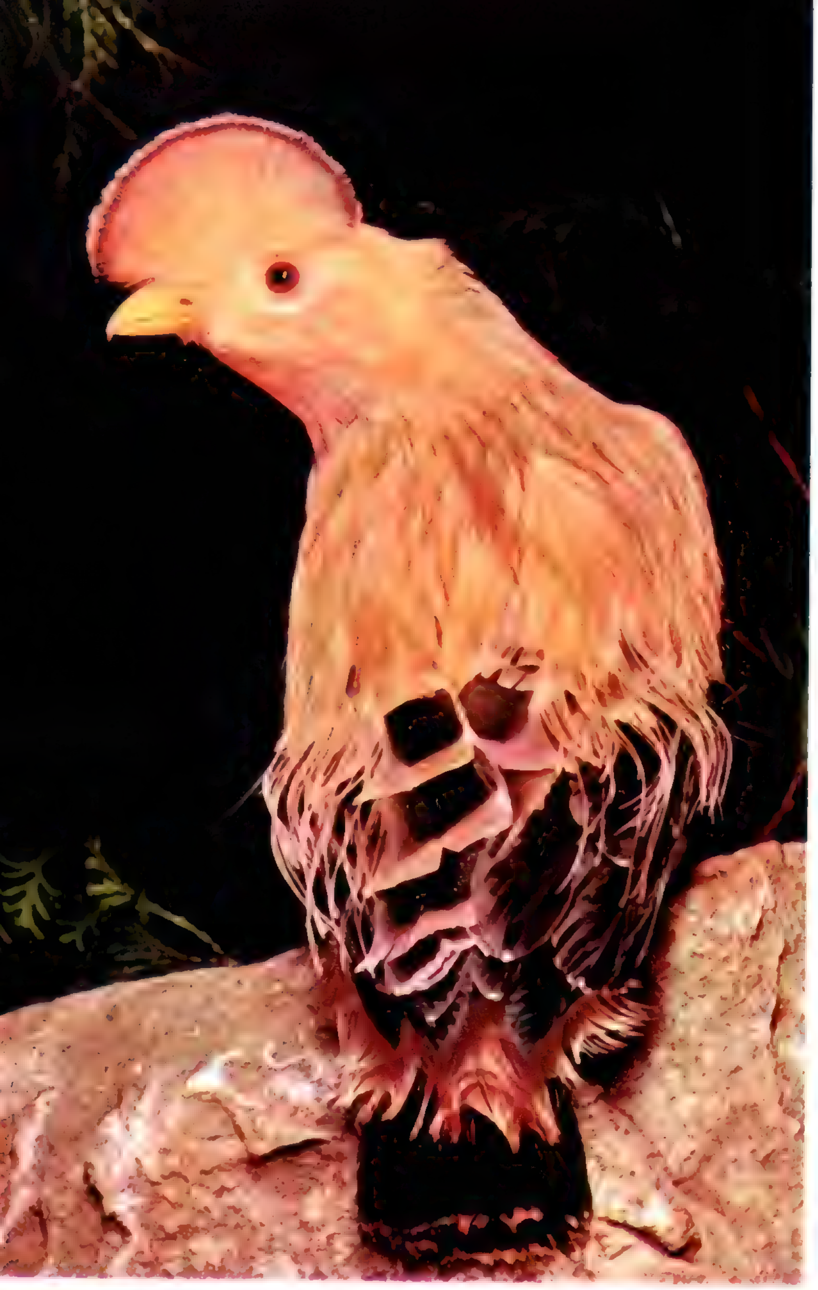
この鳥は一夫多妻制をとっているようで，つがいを組んだ直後，雌だけがこの踊り場を離れ，ひとりで巣づくりをはじめる。この巣は，草を編んだもので，木の枝のふたまたになったところにつるされる。卵は斑点がついていて，1腹の卵数は2個。当然のことながら，抱卵（ほうらん），育雛（いくすう）とも雌だけが行ない，抱卵期間は20日くらい。ひなの羽毛は，最初の1年は母鳥の羽色（うしょく）と似ている。



ペルーイワドリ。カザリドリ科イワドリ属。
古代インカ文明をしのばせるような
このあでやかな原色の衣装。
遠くからインディオの笛の音でも
聞こえてきそうだ。（84－11）
PH. E. PRENZEL

セアオマイコドリ *Chiroxiphia pareola*（雄）。
マイコドリ科セアオマイコドリ属。
ベネズエラ，ブラジル，ギアナにすむ。
黒い地に赤と青でアクセントをつけた
9センチほどのエレガントな小鳥。（上）
PH. C. P. WARNER-HOLMES LEBEL

――ねえ，きみ。おれといっしょになろうよ。
――でも，あなた，わたしのこと捨てたりしない？
セアオマイコドリは一夫多妻制といわれる。
そのごたぶんにもれず，雌のほうがじみで
雄の強引な誘いにとまどいぎみ。（下）
PH. E. ROTH



カザリドリ科 *Cotingidae*

カザリドリ科は熱帯アメリカに分布するスズメ目のグループで，約90種の鳥からなる。冠羽（かんう），肉垂れなどの奇妙な飾りをもっているものがあるため，この名がある。全長は９センチのものから45センチのものまであり，くちばしとつばさの形も多種多様で，巣も種によって非常に異なっている。たとえば，ある鳥の巣は球体状でつり下げられるが，あるものは木のほらを利用してつくられるといったぐあいだ。

このように，カザリドリ類は，姿や色だけでなく生活様式も変化に富んでいるため，かつてはいくつもの科に分類されていた。しかし，あしと声帯の構造が特殊であるため，現在ではひとつの科にまとめられている。あしはどの鳥も短く，金属的な音を出して鳴く。この鳴き声は，あるものでは鐘のような音であり，あるものでは鉄板に物を落としたような音であったりする。

この科には，イワドリ類やスズドリ類のような珍鳥が含まれているが，大部分の鳥の習性はほとんど知られていない。それというのも，これらの鳥は，アメリカ合衆国のアリゾナからペルー，アルゼンチンにいたる熱帯，亜熱帯の足も踏みいれられないような処女林にすんでいるからだ。

ところで，南アメリカの鳥類を研究しているハーバーシュミット（**Haverschmidt**）が発見したところでは，カザリドリ科の数種は，社会性をもった膜翅（まくし）類，とくにスズメバチやアリなどと緊密に協力をして巣をつくっている。これは，針で刺す昆虫（こんちゅう）類を苦手としている肉食哺乳（ほにゅう）動物から効果的に身を守る護身術らしい。カザリドリ類は，もともと食虫性だが，いったんこういう共生関係をつくると，自分を間接的に守ってくれるハチやアリなどを決して食べたりしない。

この科の鳥のうちでもっとも新しく発見された種は，1966年にペルーの密林でルイジアナ大学の，ローリー（**Lowery**）とオニール（**O'Neill**）が採集したクロガオカザリドリ *Conioptilon mcilhennyi* で，カザリドリ科の新しい属を形成することになった。この鳥はツグミより少し小さめのきれいな鳥で，からだは光沢のあるネズミ色をしており，顔は黒い。スズメ目の鳥としては珍しく，粉綿羽（粉のついた柔毛の斑状部分）をもっている。粉綿羽をもつのは多くのサギ類の特徴で，スズメ目では，ほかにはオーストラリアにすむモリツバメ類に見られるにすぎない。サギ類の場合には，この粉綿羽は，羽毛（うもう）についた魚の粘液を掃除するための一種の滑石粉の働きがあるらしいが，スズメ目の鳥の場合には，この粉がどんな役割をもっているのか，わかっていない。

ギアナイワドリ

Rupicola rupicola

ギアナイワドリは全長約30センチ，額からくちばしにかけて，平らで扇形に開いた半円状の冠羽をいただく変わった鳥だ。雄は全体にオレンジ色の美しい羽毛をもち，つばさと尾には黒い縞模様がある。雌の羽毛は全体に茶色で，雄ほどはなやかではない。

木々が繁茂し，川や急流が縦横にはしるギアナ，ブラジル北東部の山岳地帯に生息している。この地域にはえる巨木の茂みで一生を過ごし，草原には，ある種の果実を食べにいくときだけしか出ていかない。

春の繁殖期になると，雄たちは奇妙な集団ディスプレーをくりひろげる。雌雄とも，平らで何も落ちていない場所——たとえば，岩，森の空地，自分で森の地面を掃除してしつらえた平場など——のまわりに集まり，付近の小さな灌木にとまって，じっと動かず，沈黙



ギアナイワドリ（雄），カザリドリ科イワドリ属。英語でいうと Orange cock-of-the-rock。その名のとおり，ニワトリのとさかのような冠羽をいただいて岩の露出したアマゾンの密林にすんでいる。（上）

PHIL MARKHAM



を守っている。すると、そのうちの1羽の雄がまん中の“舞台”に進みでて、あちらこちらと駆けめぐる奇妙なパントマイムを、一心不乱に演じはじめるのだ。あるときは、頭を左右に振りながら両翼をひろげ、またあるときは、地面をすべったり、尾で輪を描きながら、優雅にちょっと跳んだりする。この“ダンス”は、疲れきった踊り手の鳥が、いつもとは違った鳴き声をだし、近くの枝に飛び移って休むまで続けられる。最初の鳥のダンスが終わると、すぐにほかの雄が受けつぎ、同じパントマイムをやってみせ、さらに3番め4番めと続いていく。雌は、このうちから1羽の雄を選びだし、この場を離れてつがいを形成する。

巣は洞穴などの、岩壁面にどろでつくられ、ツバメの巣と同じ方法で岩に固定される。同じ巣を何年も使い、繁殖シーズンごとに、小さな根、繊維、柔毛などを使って修理するらしい。洞穴によっては、ひとつの穴に多数の巣が隣接してかかっていることもある。この事実は、この鳥が、ある程度の群居性をもつことを証明している。1腹の卵数は2個、黒っぽい斑点のついた白い卵で、ハトの卵より少し大きい。巣立ちまえのひなたちも、成鳥の唯一の食糧である果実だけで育てられるものと思われる。

アマゾンの奥深く、昼なお暗いジャングルに
くりひろげられる秘儀。
ペルーイワドリの雄は
雌や仲間のじっと見守るなかで
黙々と求愛の踊りを踊るという。(左下)
PH: R. KINNE

ペルーイワドリ（雄）。
こんもりはえた深紅の羽毛
黒い目玉がひょっこりのぞく
視線はどこをさまようか
いとしい雌にか、おいしい昆虫にか。
PH: W. LUMMER







ギアナイワドリの分布地域より西、つまりペルーを中心としたアンデス山脈中には、同じイワドリの仲間のペルーイワドリ*Rupicola peruviana*が生息している。あざやかな紅色の羽毛をもち、つばさと尾が黒い。ギアナイワドリよりも数は少ない。

カサドリ　*Cephalopterus ornatus*

全長40センチほどの変わった鳥で、頭上にかぶとに似た大きな冠羽をいただき、のどの下部に羽毛のはえた肉垂れがたれ下がっている。カサドリの名は、この冠羽と肉垂れが、全体として傘のような形をしている（肉垂れの部分が傘の柄にあたる）ところからきたものだ。つばさと尾が暗褐色（あんかつしょく）であるほかは、全身まっ黒で、青い光沢をもっている。

この鳥は、コスタリカからブラジルにかけてのアンデス山脈東部斜面の、標高1000メートルくらいのところにまですんでいる。アマゾン上流域で、川のなかの三角州や高い木の枝の上に小さな群れをつくっている姿が見られるが、地面にいることは決してない。

この鳥のおもなえさは果実、昆虫類、クモ類。プラムのような大きな果実でも丸ごと飲みこみ，あとでたねを吐きだす。ところが，昆虫類を食べるときには、前もって細かく切りきざむ奇妙な習性がある。そして、えさを切りきざんでいるときとか、食べているとき、

狂暴そうな鳥が２羽，耳を寄せあって
何やら悪だくみの相談……
と思ってよく見ると，１羽しかいない。
それも，雌のギアナイワドリ。
ああ，あの華麗な雄にして，この女房あり。（上）
PH. W. LUMMER



飛んでいるときなどは、冠羽を後ろに倒し、肉垂れをからだに引きつけてしまうので、この鳥の特徴である"傘"の部分はまるで見えなくなってしまう。一方、枝の上に静かにとまっているときは、冠羽を立てており、肉垂れもよく目だつようにたれ下がっている。また、眠っているときは、頭部と両あしをしまいこむので、冠羽と肉垂れのほかには突きだしているもののない、羽毛の球のようになってしまう。

カサドリは、おもに朝と夕暮れどきに鳴くが、この声は耳をろうする怒号に似ていて、数羽がいっしょに叫ぼうものなら、ウシの群れでもいるのではないかと錯覚させられるほどだ。鳴くときは冠羽をさか立て、羽毛のはえた肉垂れをふくらませて、頭を傾ける。

巣は小枝を材料にしたあらいつくりで、高い木々のてっぺんにしつらえられる。1腹の卵数は2個で、殻の色は白い。

アリドリ科　*Formicariidae*

アリドリ科は53属約223種の鳥からなるが、外観や行動様式は種ごとに大きな違いがある。どの鳥もメキシコからアルゼンチンにかけてのアメリカ大陸に生息しており、全長は8～35センチとさまざまだが、大部分はそれほど大きくはない。ふつうはじみな色の羽毛で、黒、ネズミ色、茶色が多く、ときには白が混じって、それがアクセントになっていることもある。くちばしは太く、先端がわずかに湾曲している。つばさは短く、先端が丸く、長時間の飛行には適していない。この点からもわかるように、この鳥は渡り鳥ではなく、留鳥（りゅうちょう）となっている。あしは樹上にすむ種では短く、地上で暮らす種では長い。たいていの場合、雌雄二型が著しい。雄は、それほどとおりはよくないが、かなりメロディーに富んだ声で歌う。

ふつう単独あるいはつがいで森や林にすんでいる。巣は、たいてい地上からわずかの高さのところにかける。

アリドリ（英語名はantbird）といっても、アリを食べる鳥という意味ではない。アリを食べるものももちろんいるが、アリドリという名の由来はそこにはなく、この科の鳥のなかに、グンタイアリの移動集団のあとを追いかけていく習性をもった種がいることからきている。このような種としては、シロガシラアリドリ *Pithys albifrons* が有名で、アマゾン流域特産のこの鳥は、熱帯林をかいくぐり、アリのあとを追いかけてさすらいながら、アリがとり逃がした節足動物を食べて生活している。この鳥のあとを、さらに他種の鳥がついていくことも多いが、シロガシラアリドリは、自分たちが満腹してからでなければ、"おつき"の鳥たちが近寄ったり、えさをとったりすることを許さない。

カサドリ。カザリドリ科カサドリ属。
中世のかぶとのような冠羽をいただき
のどの下に巨大な肉垂れをたれ下げた異様な姿。
黒いからだが無気味に輝き
怒号に似た鳴き声が静寂をやぶる。（左下）
PH. W. LUMMER

アカメアリドリ
Pyriglena leuconota

アカメアリドリは全長約18センチ。雄は、まっ黒な羽毛をもち、肩のあたりになかば隠れた白斑がある。一方、雌のほうは、全体にオリーブがかった褐色をしている。目が火のように赤いため、この名がある。ブラジル（中央と東部）やコロンビア、エクアドル、ペルー、ボリビアの森林にすみ、とくに、地面近くのやぶのなかで多く見かけられる。

アカメアリドリも、この科の多くの代表種と同様に、森を縦横に駆けめぐるアリの大群を、追いかけまわしている。しかしこれは、ある種の鳥たちのように、これらのアリたちをえさにするためではなく、前を進むアリがとり逃がした昆虫や小動物を食べるためだ。アリの大群は、進行途上にあるものは残らずむさぼり食いながら、ジャングルを横切って進んでいく。このため、生き物はみな、山火事でも起こったかのようにちりぢりになって逃げまわる。アカメアリドリは、これを利用してえさをとるわけだ。

この鳥の巣は、大部分のアリドリ科の鳥の場合と同様に、地面からわずかの高さのところにつくられる。1腹の卵数は2、3個で、殻は白っぽい色をしている。巣づくりの作業や育雛（いくすう）は、雌雄で行なう。

ヒメジアリドリ。アリドリ科ヒメジアリドリ属。
学名は *Grallaricula loricata*。
全長約11センチの小鳥。
南アメリカの熱帯林の
下草層で暮らしている。
PH. VISAGE JACANA



カマドドリ科　*Furnariidae*

カマドドリ科は、中央・南アメリカに産するスズメ目のグループで、58属 221 種の鳥からなる。カマドドリという名は、この科に属する一部の種が、かまど形をした粘土製の巣をつくることからつけられたものだが、この科には、こういった意味でのカマドドリ類のほか、ヤブクグリ類、トゲオドリ類、トゲハシドリ類など多くの小グループがあり、それぞれ、形態のうえでも生活様式のうえでも相当の違いがある。

全長は12～25センチで、大部分はネズミ色やオリーブ色をおびた濃褐色の羽毛をもち、顔の下半部が白っぽいものが多い。雌雄二型はほとんど見られず、くちばしは、どちらかというと細めだ。

この科の鳥は、分布域が広く、しかも、森林にも、海岸沿いにも、パンパスにも、アンデス山脈中の不毛の砂漠にも生息しているため、その生活形態は実に多様だが、習性についてはほとんど調べられていない。しかし、これまでに知られている種の大部分は、アリなどの昆虫類をえさにしており、また、営巣（えいそう）、抱卵（ほうらん）、育雛は雌雄が協力して行なう。単独性のものも、かなり多数の群れをつくるものもある。

セアカカマドドリ

Furnarius rufus

全長約20センチ。からだの上部は赤褐色、つばさは茶色で、のどの白いじみな鳥だ。ブラジル南部、ボリビア、パラグアイ、アルゼンチン北部にすんでいる。ふつうはパンパスで見かけられ、地上にも木の枝にもいる。単独で暮らしていることもあれば、つがい、あるいは小さな群れをなして生活していることもある。昆虫類を主食にしており、地面をすばやく跳びあるきながら移動して、えさを捜す。これに反し、飛ぶのはのろく、長く飛ぶことはない。

鳴き声はよく響き、遠くまでとどく。木や屋根のへり、塀の杭などに雌雄が並んでとまり、いっしょにさえずるが、音調は異なっている。

敬虔なる"パン屋"

セアカカマドドリは、パン焼きがまの形をした巣をつくる。このため、この鳥は、ブラジルではオルネロ（hornero）、すなわち"パン屋"と呼ばれ、また、日曜日の安息を尊重する、敬虔な鳥だとされている。つまり、この鳥は日曜日には決して巣づくりの作業をしない、というのだ。このいい伝えは、長い間、巣づくりの作業が早く、1週間以内で完成するためだと説明されてきた。しかし最近の調査では、巣づくりには、早くとも10日から16日を要するという事実が確認されている。

巣は、一般に水平か軽く傾いた木の枝や、農耕地の柵の上に置かれる。まず、地面から雨で柔らかくなったどろの小さな玉を運び、雌雄が協力しながら、あしとくちばしで平らにして土台をつくる。この土台が、縦30センチ、横20センチほどになると、こんどは、どろの帯を軽く内側に傾けながら、約5センチの高さに巻きつける。この上に、さらに第2

セアカカマドドリ。カマドドリ科カマドドリ属。
どろを固めたパン焼きがまのようなりっぱな巣。
ちゃんと2部屋に仕切られ、奥が産室になる。
でも日ざしを浴びると、そのなかの暑いこと……
これじゃ、まるで焼鳥がま。
PH. F. ERIZE

ミドリヒロハシ *Calyptomena viridis*。
ヒロハシ科ミドリヒロハシ属。
マレーシア地方に広く分布する。
何はともあれ、静かな熱情を秘めたような
エメラルド色の輝きをごらんください（右）。
PH. P. A. MILWAUKEE JACANA



の帯を，前よりずっと傾けて積みあげる。さらに第3，第4……と続き，最後には，壁面の上部がつき合わされて，ドームができあがる。このドームの側面には，縦長の入り口がついていて，ちょうどミニチュアのかまどのような形をしている。高さは約25センチ，壁面の厚さは2.5～4センチで，全体の重さは5キロ以上もある。

この巣の内部には，約5センチ幅の入り口のついた仕切りがある。産座は，この仕切りで隔てられた奥の小さな部屋につくられ，細い枝や羽毛，綿くずなどがていねいに敷きつめられている。このなかに雌が2～4個の白い卵を産むと，雌雄はかわるがわる抱卵する。育雛も雌雄が協力して行なう。第1回めの産卵は9月はじめ，第2回めは11月である。

奇妙なことに，繁殖期が9月から12月にかぎられているにもかかわらず，巣づくりの作業は1年じゅう行なわれる。雨が降って，どろが柔らかくなれば，いつでも巣づくりの作業をはじめるのだ。巣は，つねに目だつところにあるので，日光にさらされ，内部はすぐに耐えがたい暑さになる。これは，1月や2月のもっとも暑い季節には，セアカカマドドリが繁殖しない理由のひとつだ。

なお，この巣は，2，3年はじゅうぶんにもつがんじょうなものだが，セアカカマドドリは次々と新しい巣をつくるので，使い捨ての巣を他の鳥が利用することも多い。





ヒロハシ科　*Eurylaimidae*

ヒロハシ科は旧世界に産するスズメ目のグループで，８属14種からなる。ほかのスズメ目の鳥は頸椎骨(けいついこつ)が14個しかないのに，この科の鳥は15個あるのが解剖学的な特徴で，からだにくらべて頭が大きい。全長13～28センチのずんぐりした鳥で，原色系の美しい羽毛をもつものが多いが，雌雄二型はほとんど見られない。くちばしは一般に大きく，上くちばしの両側は下くちばしにおおいかぶさっていて，先端が鈎(かぎ)のように曲がっている。あしはがっちりしていて，短い。つばさは先が丸くなっている。

南アフリカや，中国南部からインドネシア，フィリピンにいたる南アジアに分布し，単独あるいは群れで森林にすんでいる。いつも木木の茂みにいて，昆虫を捕えるときにしか飛ばない。側面に入り口のついた，大きな洋梨のような形の巣をつくって，木の枝などにつり下げる。

この科の鳥は，アフリカ，インド，マレーシアにすむいわゆるヒロハシ類11種と，マレーシアに生息しているミドリヒロハシ類３種に分けられる。前者は，幅の広いくちばしと11本の初列風切羽（しょれつかざきりばね）をもっているが，後者のくちばしは細く，上くちばしが小さなさか立った羽毛におおわれていて，初列風切羽は10本しかない。ミドリヒロハシ類の尾は短く，先端が断ち切られたような形をしている。

ミドリヒロハシのくちばしは
その名にたがわず，幅広いが
他のヒロハシ類よりずっと小さく
つけ根のあたりは
ふさふさとした羽毛におおわれている。
PH. J. BURTON-PHOTO RESEARCHERS

アズキヒロハシ

Eurylaimus javanicus

アズキヒロハシは，キオビヒロハシともいい，全長約20センチ。からだの上面は黒く，つばさに黄色，尾に白の斑帯がある。下面は紅紫色だ。東南アジアに分布し，川岸や沼地で昆虫類やその幼虫を食べて生きている。

同じ科の他の鳥と同様，巣づくりの名人で，両端が少しとがって下部のふくらんだ洋梨型の巣をつくる。材料は草で，これを巧妙にからみ合わせ，長い束にしてふさをつくり，池や川の水面(みなも)に張りだした細い木の枝につり下げる。側面に入り口があり，そこから，下部のふくらんだ部分にある部屋にはいる。

ヤイロチョウ撮影記

高野伸二

日本にいる鳥のうち、もっとも美しいものは何かと問われたら、わたしは即座にヤイロチョウをあげるであろう。日本にいる鳥のうちで、もっとも珍しいものは何かと問われたら、わたしはやはりヤイロチョウをあげるであろう。それは女王のごとく美しく、宝石のごとく稀有な種類に属するのである」——これは、『野鳥』という雑誌の1937（昭和12）年9月号に書かれた内田清之助博士のことばである。

むかしから、ヤイロチョウは繁殖期の5～7月ごろに何回か捕えられた記録がありながら、はたして日本には迷ってくるだけなのか、それとも繁殖するのかについては確認されていなかった。そのヤイロチョウの巣が日本ではじめて発見されたのは、1937年6月、高知県宿毛の山中でのことである。その発見の喜びとともに書かれた博士の文章が、ヤイロチョウに最大級の賛辞を与えたのは当然のことだった。

そして博士は同じ文章のなかで、①徳川末期にできた『飼篭鳥』という本に「ヤイロチョウは隅州の須木又は小林という所の両村の山中から秋になって出る」とあるところから、むかしは霧島山あたりに生息繁殖したらしいこと、②高知県宿毛では、この鳥の鳴き声をシロヘン、クロベンときくこと、③南九州ではこの鳥のことを“赤ダンナ”といい、ダンナとは男子の下帯（ふんどし）のことであること、④宮崎県下でオハチコハチと鳴く美しい鳥がいるという話があるが、これもヤイロチョウらしく思われること、などを書いておられる。

それから33年。

1970年7月4日の昼過ぎ、わたしは宿毛営林署のジープに揺られて、山道を登っていた。「女王のように美しく、宝石のようにまれな森の精」ヤイロチョウに合える幸運に胸をときめかせながら。

これに先立つ6月20日ごろ、林野庁造林保護課からかかってきた電話が、この幸運のはじまりであった。高知県宿毛営林署管内の山林でヤイロチョウらしい巣が見つかり、現在抱卵中なので、記録写真をとりに行なってはもらえないか、というのである。ひなは7月1日ごろにかえる予定という。またとない機会である。わたしは一も二もなくオーケーし、育雛（いくすう）の場面が見られるよう、7月5日に東京を立つ予定を組んだ。

ところが、しばらくしてまた電話があり、6月29日にはもうひながかえっていたという。ひなが巣立ちをしてしまえば、家族は離散してしまうから、写真もとれなくなる。ぐずぐずしてはいられない。そこで、計画を変更し、7月3日の夜、とるものもとりあえず東京を立った。翌4日に宿毛到着、営林署のかたがたに会い、巣は地上にあること、そんなに山奥ではないこと、今朝もひなは無事であったことなどを聞き、ほっとしてジープに乗ったのである。

自然林に囲まれて

付近はすべて国有林である。多くはヒノキやスギを植林したものであるが、尾根や谷沿いには幅40メートルの常緑広葉樹林が残されている。これが野鳥の保護上たいへん有効なのであろう。このような自然林からはオオルリのさえずりが聞こえてきた。この地域に今もヤイロチョウが繁殖しているのも、この自然林ベルトのせいにちがいない。そんなことを考えているうちにジープがとまった。

それから歩くこと30分。よくヤイロチョウがえさをとっているという谷沿いの湿った林を過ぎると、ヒノキの南面の林に出た。この道から5，6メートル下の斜面にヤイロチョウの巣があるのだ。といっても、木の枝や枯れ葉をドーム型に積みあげた巣は、ちょっと見たのではわからない。だが、それらしきところから、ひながちょこっと顔をのぞかせていた。

感激の一瞬、というところだが、実をいうと、それより先に、わたしは困ってしまった。

かえってから1週間くらいと予想してきたのに、そのひなはもう巣立ち直前の大きさではないか。くちばしは黒くて先端と口角のところが明るいオレンジ色である。こう大きくてはうっかりすると、危険を感じた鳥が撮影中早目に巣立ってしまうおそれがある。驚かさないためには、カメラだけを巣の近くに置き、親鳥がとまるだろうと思われる所にピントを合わせておいて、遠くからシャッターをおとすという方法よりない。それでも1枚1枚フィルムを巻きあげるために近づかなければならない。ひやひやである。

カメラをセットして巣から約8メートル離れた木の陰にブラインドをかぶって潜んだのが午後3時ごろ。親鳥ははたしてすぐくるだろうか、ピントを合わせてある所にとまるだろうか——次から次へと不安がこみあげ、息つまる思いである。

約20分、ちらりと動くけはい。木の枝にとまって警戒するようにあたりを見まわす。くちばしにミミズらしい長いものをくわえている。何回か枝移りしたあとにはっと飛んで巣の前におりた。ひなたちは大口をあけてジュルジュルとえさをねだる。シャッターを押しても親鳥は驚くようすもなく、しばらく巣の前にいてから、ひなのふんをくわえて去った。急いでフィルムを巻きあげると別の1羽がくる。こうして夕方までに7枚のシャッターを押した。

この夜は山中の造林小屋にとまったが、台風が近づき、この夜と5日は強風と雨であった。天気の回復を待つこの1日の長かったこと。巣立ってしまったらと心配でしかたがない。明けて6日は絶好の快晴。朝早く小屋を出て、巣に近づき、はやる心を押えて見ると、まだ5羽とも巣にいる。ほっと一息ついて、4日と同じようにカメラをセットし、エアレリーズを引いて潜んだのが7時ごろか。

親鳥は少しも警戒しないで、かわるがわるひなにえさを与え、ふんをくわえて飛び去る。ひなは巣立ち近いヒバリのひながするように、親がくると巣から出て、えさをもらったりした。ひなの色は親よりもずっと鈍く、肩のコバルト色の部分も白い。

5羽の若鳥の巣立ち

こうして約20枚のシャッターを押した午後12時25分、なんの前ぶれもなしに1羽のひなが巣から飛びでて、約10メートル飛んでやぶのなかにおりた。と次の1羽が巣を出てのこのこと斜面を登る。巣立ちである。残る3羽もまもなく出るだろう。このままいるとひなを分散させるおそれがある。これ以上、長居は無用。急いでカメラをかつぎ、その場を離れた。

少し離れた渓流までいき、のどを潤した水のおいしかったこと。ふり仰ぐ梢の上に7月の青空があった。白い雲が流れていた。巣立ちには最適の穏やかな日であった。

このヤイロチョウの繁殖の経過を振り返ってみると、6月17日5卵の巣を発見、19日5卵在中、25日親が巣の中にいるのを確認、29日ひなのみ5羽、7月2日ひな5羽無事、6日巣立ちということになり、6月22日か23日にひながかえったのではないかと思う。

しかしシャッターを押したものの、ファインダーをのぞいてピントを合わせてとったのは1枚もないのだから、すこぶる不安である。現像ができるまでこの不安はますますつのった。できあがったフィルムは、ピントの合っていないのが約10枚、ポーズが悪いのが数枚、ブレたのが数枚、結局どうやら合格点に達したのは5枚だけであった。同じ方向の斜め上からばかり写したので、下腹部の赤、あの有名な「赤だんな」が1枚も見えない。＊



1　秋田市赤沼　1969.5.31
2　栃木県塩谷郡塩原町大沼　1967.5.5
3　石川県輪島市舳倉灯台　1963.5.31
4　福井県福井市　1958.6.16
5　福井県今立郡三里山　1959.7.14
6　（同上）　1963.6.16
7　山梨県南巨摩郡身延町梅平　1964.10.31
8　長野県下伊那郡和田町　1954.5.24
9　広島県比婆郡西城町　1960.8.11
10　長崎県対馬下県　毎年繁殖
11　高知県安芸市穴内　1954.5.2
12　高知県幡多郡一帯　毎年渡来繁殖
13　長崎県南高木郡雲仙　毎年？渡来繁殖
14　宮崎県東臼杵郡西郷村　1968.9.1
15　宮崎県西諸県郡須木村内山　1951.9.23
16　宮崎県西諸県郡御池周辺　1972.6.9

鳥の世界 もうひとつの見方

浦本昌紀

20 いくつになれば繁殖できるか

鳥の世界で繁殖に関するもうひとつの問題は、育った若鳥はいつになったら繁殖しはじめるのか、ということです。ふつうの小鳥は、生まれた翌年の繁殖期には交尾・産卵するものが多いので、どんな鳥でもそうなのだろうと思っている人が多いのではないでしょうか。しかし実際には、鳥によって、ときには条件によって、さまざまなのです。

ごく大ざっぱにいうと、からだの大きい鳥ほど、はじめて繁殖する年齢がおそいのですが、それは必ずしも大きく育つまでに時間がかかるからではありません。大きい鳥でも独立したときには一人まえの大きさになっているのがふつうですから。それでは、まず繁殖の始まる年齢について探ってみましょう。

いくら早く繁殖を始める種でも、ふつうは生まれた翌年の繁殖期からだ

地球上のほとんどの地域では、1年を周期にした季節変化があります。そこでは、鳥の繁殖に適した食物の多い季節は長続きせず、まもなく食物の少ないきびしい季節にとってかわります。

そこで多くの鳥では、ある繁殖期に生まれた子どもは、いくら早く育っても、その繁殖期のうちに一人まえにはなれませんから、最初の繁殖は次の繁殖期まで待たなければならないことになります。したがって、ある繁殖期の3回めの営巣で孵化したひなのように、おそく生まれた個体が、たとえ次の繁殖期にいちばん早く繁殖にはいったとしても（実際には繁殖経験のある個体のほうがはじめて繁殖する個体よりも早く繁殖を始めます）、子どもは孵化後7、8か月ではじめて繁殖するのがせいぜいです。ふつうは満1歳になる少し前が最初の繁殖年齢になります。

しかし、熱帯地方には1年じゅうほとんど季節変化のない地域があります。それは熱帯降雨林と呼ばれる湿潤な森林地帯です。一方、熱帯の乾燥地帯の一部には、乾期にくらべて食物の多い雨期が1年に2回やってくる地域もあります。このような地域で繁殖する小鳥は、孵化後どのくらいたったら繁殖にはいるのでしょうか。

残念ながら、このような地域でのくわしい研究はまだほとんどされていないので、一般的なことはわかりません。非常に若いのに繁殖したということが知られている例をあげてみますと、オーストラリアのキンカチョウとアフリカのコウギョクチョウ（どちらもカエデチョウ亜科）で、孵化後3か月めに繁殖したものがあり、中南米のベニハシスズメバトで約5か月という例がありますし、アフリカミフウズラも5か月で繁殖できるといわれます。

しかし、このような地域の鳥のなかには、もっと早く繁殖するものもあるかもしれません。というのは、じゅうぶんに食物を与えて飼った場合に、もっと早く繁殖することがわかっている鳥があるからです。

鳥のなかで知られているこれまでの最短記録はウズラで、孵化後5、6週で産卵します。また、ある1羽のキンカチョウが6週で産卵したという例もあります。ニワトリでは早くても約10週しないと産卵しません。そのほか、セキセイインコは雌雄どちらも孵化後2か月ばかりで繁殖できますし、ウスユキバトで75日、ジュウシマツやドバトで3か月余りという例があります。このような鳥はすべて草の種子を主食としており、広い意味で乾燥地帯の鳥です。雨期の到来は、温帯や寒帯での春の訪れのように毎年規則正しくはないので、このような鳥は条件がよくなれば、ただちに繁殖にはいるような生理的仕組みを持っているのでしょう。

同じ種でも、繁殖する年齢には差があり、なかでも雄は雌よりまだおそい

非常に多くの鳥が、孵化した翌年の繁殖期に繁殖します。スズメ目の大部分をはじめとする小型の鳥、たとえばハト、インコ、ハチクイ、一部のチドリなどや多くのカモがそうです。しかし、この通例からはずれる鳥も決して少なくはありません。まだ研究されていない鳥も多いのですが、一応鳥の世界を見渡すことはできます。

ここで問題になるのは、はじめて繁殖する年齢に雌雄で違いのある鳥がいることと、同じ種の同じ性でも個体差のある鳥がいることです。その点まで研究された鳥はわずかしかありません。

まず、雌は約1歳で繁殖するのに、雄は2歳にならないと繁殖しない鳥があります。これは特定のつがいをつくらない鳥と、一夫多妻の鳥に主として見られ、ハタオリドリ類、キンランチョウ類、ムクドリモドキ類、マイコドリ類、大型のキジ類、一部のライチョウ類などで見られています。また、一夫一妻と思われるテンニンチョウ類やキンショウジョウインコ類、ミカズキインコ類でもそうです。このような鳥の多くでは、雄は2歳にならないと完全な成鳥の羽色にはなりません。

そのことから逆に、雌雄で繁殖羽が異なり、雄が成鳥羽になるのに1年以上かかる鳥では、雄がはじめて繁殖するのは雌より1年以上おそいのだろうとみなされることがあります。しかし、キンケイやギンケイでは、雄が完全な成鳥羽にならないのに繁殖した例が飼育下でありますから、この点については用心しなければなりません。フウチョウ・ニワシドリ類では雄が完全な成鳥羽になるのに数年かかるものがあります。多夫一妻の鳥でどうなのかはまだ研究されていません。

次に、ホシムクドリ、イエスズメ、マダラヒタキというような、くわしく研究された樹洞営巣性の鳥では、一部の雄が2歳まで繁殖しないことがわかっています。このような鳥では、上記の一夫多妻の鳥の多くや大型の鳥のように1歳では繁殖できないのではなくて、いい巣穴を確保すればおそらく繁殖できるのではないかと考えられます。

ヨーロッパでくわしく研究された2種のアマツバメ科の鳥では、生まれた翌年に繁殖するものはごく一部でしかなく、大半の個体は若鳥どうしでつがいになって巣穴を確保しても繁殖せず、2歳になってはじめて繁殖し、一部の個体は3歳ではじめて繁殖します。こうした個体差はおそらく多くの鳥でこれから発見されるでしょう。すでにたとえばタゲリでは、多くの個体が2歳ではじめて繁殖するのに、一部は1歳で繁殖し、多くのシギ類ではおそらく少なくとも一部の個体

カラーページ解説

のにもがっかりした。しかし、なかなかないチャンス、1枚でも写っていれば満足すべきであるとみずからを慰めた。こうしてできたのが、カラー本文5ページの写真である。

日本での観察記録

ところで、これまでに日本でヤイロチョウの巣が発見されたのは、長崎県雲仙で1例、対馬で1例、高知県で数例あるのみで、発表されているのは10例にならないであろう。鳥体が観察されたり、採集されたりした場所は、最近20年間では秋田から南九州まで広範囲にわたっている（図参照）。日本で最北の記録は秋田市赤沼（1969年5月31日）であり、北海道からは未記録である。福井県では、1958、1959、1963年とごく近い場所で記録され、迷行的なものではないことを暗示している。栃木県塩原（1967年5月5日）では2羽同時に観察されている。

1971年夏には高知県中村市の奥の部落に近いシイタケ栽培が行なわれている雑木林で巣が発見され、無事に巣立ったと、中村市の沢田佳長さんからご連絡をいただいた。

また1972年夏、広島県庄原市の小川光昭さんからは、1960年8月に同県比婆郡西城町の民家にあたって死んだヤイロチョウの剥製の写真が送られてきたが、おもしろいことに、それは明らかにその年生れの幼鳥羽のものであった。これまでに繁殖の知られた所以外でも、繁殖しているのではないかと推察されながら手がかりがなかったが、この報告によって広島の山でも繁殖の可能性がじゅうぶんあることが明らかにされた。この近くの帝釈峡ではさえずりも確認されているという。

また1972年6月9日に、宮崎県霧島山麓の御池近くで、ヤイロチョウが観察、撮影されたという報告があった。ここは、内田博士の文中にある須木や小林のすぐ近くで、常緑広葉樹の原生林がよく保存されたすばらしい所である。この報告に先立ち、同じ年の2月にたまたまわたしは御池を訪ね、その原生林のなかを歩きながら、初夏にはヤイロチョウがここにくるのではないかと思ったことがあるだけに、この報告は喜びであった。しかも、この付近では何年か前にも幼鳥が捕獲されているとか。江戸時代から知られたヤイロチョウの産地が、現在もなおヤイロチョウの繁殖地として健在であるならば、それはすばらしいことである。

ヤイロチョウはただ美しいというだけでなく、分類学上も珍しい貴重な種類である。これ以上繁殖地を破壊しないよう願ってやまない。■（日本野鳥の会理事）

は1歳では繁殖しない，ということがわかっています。

大型の鳥ほど繁殖を始める年齢は高く，10歳くらいになってやっと繁殖活動を始める鳥もある

個体差は大型の鳥ほど著しく，コブハクチョウでは飼育下で研究したところ，はじめて繁殖する年齢はごく少数が2歳，ふつうは3歳か4歳，それ以上8歳までの個体も少数あった，ということです。そして，ハクチョウやガンでは，飼育下では野生のものより1年早く繁殖にはいるのです。

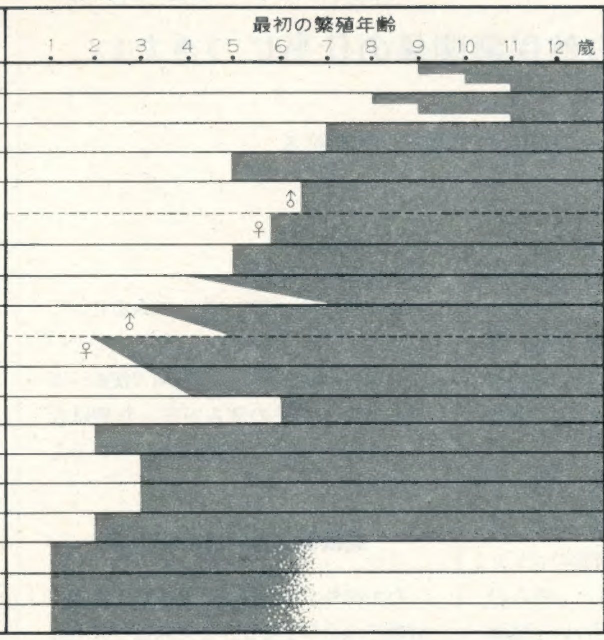
はじめて繁殖する年齢を調査するのは，このようになかなかやっかいです。しかし，1歳では繁殖しないということがわかっている鳥に，ミヤマガラス，アオサギ，アイサ類〔雄は2歳でも繁殖しない？〕，アビ類，大型カイツブリ類，ペリカン類などがあります。そしてさらにおそく繁殖にはいるものとしては，オウム目で大型のコンゴウインコ類やオウム類，ワシタカ目で大型の鳥，ダチョウ，ツル類，コウノトリ類，フラミンゴ類，ガン・ハクチョウ類などがあり，3～5歳ではじめて繁殖します。

また，海鳥は一般におそくて，カモメ・アジサシ類，ウミスズメ類，ウ類ではふつう3歳，比較的小型のコシジロウミツバメで4歳かそれ以上，カツオドリ類で5歳，ミズナギドリ類で5，6歳，アホウドリ類で5～11歳というところがおおよその年齢です。ハシボソミズナギドリでは雌のほうが雄より1年早いことがわかっています。鳥の世界でいちばんおそく繁殖にはいるものは，おそらくアホウドリ類かワシタカ類で大型のもののなかにいるのでしょう。それとも大型ペンギンかもしれません。

繁殖年齢の高い鳥ほど1腹卵数が少なく，また成鳥になって長生きする

鳥のなかには親から離れて独立するのに1年以上かかるものはいないのに，はじめて繁殖するのがそれよりおそいものがこのようにいろいろあるのはどうしてでしょうか。この問題もまた研究が始まったばかりです。だが，このように鳥の世界をながめてみると，それがひとつには雌雄関係と関連があり，ひとつには営巣場所と関連があり，そして，さらに海鳥とか猛禽とかいう生活様式とも関連がある，ということができます。さらに，前にお話したように，雌雄関係や営巣場所も生活様式と関連があるように思われるので，結局は最初の65号でお話したような，さまざまな生活様式の問題に帰っていくことになるのです。

繁殖の始まる年齢の比較　D. Lackより



種名	科名	成鳥の年死亡率 %	1腹卵数 個
ロイヤルアホウドリ ＊	アホウドリ科	—	1
ワタリアホウドリ ＊	アホウドリ科	3	1
コアホウドリ	アホウドリ科	—	1
クロアシアホウドリ	アホウドリ科	—	1
ハシボソミズナギドリ	ミズナギドリ科	6～7	1
マンクスミズナギドリ	ミズナギドリ科	5	1
シロカツオドリ	カツオドリ科	5～6	1
グランドペンギン	ペンギン科	13	2
ミツユビカモメ	カモメ科	12	2
セグロアジサシ	カモメ科	16～20	1
ユリカモメ	カモメ科	18	3
セグロカモメ	カモメ科	30	3
ウミネコ	カモメ科	30	3
ヨーロッパアマツバメ	アマツバメ科	18～20	2～3
ロビン	ツグミ科	57～62	5
シジュウカラ	シジュウカラ科	50	7～11
スズメ	アトリ科	55	4～6

＊　それぞれ1羽ずつが知られている。平均はたぶん10年かそれ以上。　　1歳というのは，生まれた翌年の繁殖期に繁殖するもの。

ところで，これまでは繁殖に関係したいろいろな性質や習性を別々に取りあげて，それぞれが鳥の世界でどのようにさまざまな現われ方をしているかをながめ，それはなぜだろうかということを考えてきました。しかし，はじめて繁殖する年齢が雌雄関係や営巣場所と関連があるというように，別々に取りあげてきたいろいろな性質や習性は，決して個々ばらばらなものではありません。たとえば，はじめて繁殖する年齢が3歳以上である鳥はほとんど必ず1腹の卵数が1～3個であり，一度繁殖すると何年も長生きして繁殖を続けます。その反対に，生まれた翌年から雌雄ともに繁殖する鳥の多くは1腹の卵数が多く，一度繁殖すると翌年までに半分近くかそれ以上は死んでしまいます。これに対する大きな例外は，2卵しか産まないハト類くらいなものです。

また，アフリカ産のハタオリドリ類で明らかにされたところでは，森林にすむ昆虫食の種は単独生活で一夫一妻であり，雌雄の羽色は1年じゅう同じで，どちらも生まれた翌年から繁殖し，卵やひなの世話は雌雄で行ないます。これに対し，サバンナや草原にすむ種子食の種は群れで生活し一夫多妻であり，雄は繁殖羽が著しく雌と異なり2歳にならないと繁殖にはいらず，巣づくり〔の大半〕は雄がやり，抱卵・育雛は雌だけがやります。しかしこの場合にも多少の例外はあります。

だが，この2つの例は，いろいろな性質がさまざまに組みあわされることはなく，いくつかのセットになって現われる，ということを明らかに示しています。そしてハタオリドリ類の場合には，そのセットがすみ場所や食物と関連をもっていることも明らかです。

鳥は〝鳥〟という与えられた枠のなかで，さまざまなすみ場所へ進出し，さまざまな食物をとるものへと分かれてきました。それにともなって，くちばしやあしの形や食物のとり方はさまざまになりましたが，それと同じように繁殖のしかたもそれにともなった変化をしてきたのです。

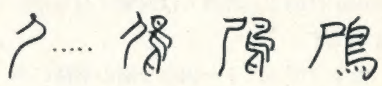
それぞれの鳥は，自分のすみ場所と食物からして，どのような繁殖の作戦をとればいちばん多くの子孫を残すことができるか，を〝探し求め〟て，それぞれが現在のようなやり方をとって解決したのでしょう。

それぞれの鳥がなぜ現在の解答を選んだのか，を理解しようとする研究は，この10年の間に急速に進んできました。しかし，わたしたちは，まだそれをじゅうぶんに理解するところまでにはなっていません。鳥たちの解答がはたして最良の解答であるかどうかもわかりません。そして，何よりもまず，わたしたちは，大部分の鳥については，かれらがどんなセットを解答として提出したかさえ知りません。熱帯の鳥ばかりでなく，日本の鳥についても研究はまだ始まったばかりなのです。■

〔編集部から〕 すみ場・食べ物・繁殖活動を中心に20回にわたって鳥の生活を見てきましたが，今回でひとまず終わらせていただきます。機会を改めて，さらに生態面を中心に再び浦本先生に書いていただくことになっています。ご期待ください。

漢字のふるさと　60

藤堂明保



鳲（カッコウ）　郭公ともいう。ただし中国の俗語では，古くから布穀鳥といった。「カッコウ」と鳴いていると聞く人もあるし，「ブクウ，ブクウ」と鳴くと聞きとる人もいる。鳴き声とはふしぎなもので，聞きようで，どうにでもかわる。カッコウにあてたのが郭公という字，ブクウにあてたのが布穀（bùgǔ）である。しかもこの鳥は，4月の「穀雨」のころ鳴き始めて，「夏至」になると姿を消す。つまり麦刈り，田植えのころに，さかんにブクウ（布穀＝田畑に作物を布け）と告げているのだ――と農村の人たちはいうのである。

しかし昔の文語では，この鳥を鳲（シ）と呼んだ。ハトに似ているので，鳲鳩（シキュウ）ということもある。すでに『詩経』の中に「鳲鳩」と題する一篇があって，

鳲鳩は桑にあり，その子は七つ。
淑人君子，その儀は一つ。（曹風）

と歌っているほどだから，昔から農村の風物のひとつであった。

鳲という字は「尸（シ）＋鳥」からなる。尸とは，人が体を曲げて短くし，あおむけに尻をつけた姿を描いた象形文字で，いわば屍（シ）の原字である。「屈身仰臥」という埋葬のしかたを表わしているのだが，それから転じて，短く直線状をなしたものをシと呼ぶ。たとえば屎（シ）とは，短くまっすぐなウンコのことである。カッコウは短身で，棒状の体形をしているところから，これを鳲と名づけたのであった。この古代語に比べると，郭公とか布穀とかいう名の方が，詩情があっておもしろい。■



自然保護関係の仕事につきたい

──読者の質問へのお答え

〈問〉 ぼくは中学3年生です。近ごろテレビや映画で知ったのですが，アフリカには野獣を密猟から守ったり，生態の調査をしたり，研究機関の注文で生けどりにしたりする動物レンジャーという職業があるそうです。

ぼくは将来アフリカに渡り，タンザニアなどの狩猟監視官になりたいと思っています。また，日本の国立公園のレンジャーにも関心を持っています。これらの職業につくには，これからどういう勉強をし，どんなコースに進んだらいいか教えてください。

（東京・大田区　白井公治）

〈答〉 職業の選択にも流行現象があるようで，自然への関心が高まっているせいか，白井君と同趣旨の質問が，何通か編集部へ寄せられました。

関係各方面に問い合せた結果を以下にまとめてみますが，自然保護の仕事はテレビや映画で紹介されるようなカッコいい面ばかりではなく，実体は非常にじみなものだということを，まず頭に入れて読んでほしいと思います。

アフリカのゲーム・スカウト

タンザニアのセレンゲッティー国立公園には，ゲーム・スカウト（狩猟監視官）の養成学校があります。だがこれは，現地人のゲーム・スカウトを養成するのが目的で，外国人は対象にならないようです。

セレンゲッティー国立公園の事情に詳しい人の話だと，ゲーム・スカウトの仕事は，シマウマ模様に塗ったジープで公園内の密猟を監視したり，観光客を動物のいるところに連れていったりするという，かなりレベルの低いものだということです。開発途上のタンザニアではこういう仕事に外国人を雇って給料を払うゆとりはないのです。

タンザニア大使館に聞いてみると，これまでゲーム・スカウトになりたいという日本人の希望がいくつか同大使館へ寄せられたが，その望みが実った例はなく，今後もあまり可能性はないということでした。

実績ある青年海外協力隊

だが海外で自然保護の仕事をする道は皆無ではありません。たとえば「日本青年海外協力隊」という制度です。これは政府事業として，1965年に発足しました。開発途上国からの要請を受けて，農林水産，交通通信，土木建設などの技能または技術をもつ日本青年を2年間派遣するというものです。

1972年4月までの派遣実績は，総計1159人。カンボジア，インド，ラオスなどのアジア諸国，ケニア，モロッコ，タンザニアなどのアフリカ諸国，そして中南米のエル・サルバドルなどへ日本の青年男女が出かけています。

任地での隊員の待遇は，海外手当として月に170ドル（5万2360円）支給されます。なお，これとは別に国内で月額2万円の積立金があり，帰国時にまとめて支払われます。いずれも日本の国家予算から出るわけです。

応募資格は20歳以上の青年男女ならだれでもいいわけですが，任期は2年，あくまで自由意志に基づく国際協力なので，これを一般の就職と考えるわけにはいきません。事務局でも帰国後の就職斡旋はしていないようです。

最近もタンザニアのゲーム・スカウト養成学校から「柔道，水泳，サッカーを指導する体育教官」の要請があり，選考によって1名の派遣が決まったそうです。このケースなどは白井君の希望に近いのではないかと思います。応募要綱など詳しいことは，〒150　東京都渋谷区広尾4-2-24　日本青年海外協力隊事務局へお問合せになればいいでしょう。



タンザニアの奥地で現地人と生活をともにする日本人。

レンジャーもお役人

次に日本の国立公園のレンジャー（管理員）ですが，これになるには環境庁のお役人──つまり国家公務員になることが必要です。

人事院が年に1回行なっている国家公務員上級職試験の「造園職」を受験し，上位7，8番以内で合格すると，国立公園のレンジャーとして採用される可能性が高いようです。

この試験は21～33歳の年齢制限だけでだれでも受けることができます。だが現実には，大学の農学部で造園学を専攻した人がやはり有利のようです。

ところで，環境庁に就職が決まっても，レンジャーとして希望の国立公園に長くいられるとは限りません。3年くらいの周期で配置替えが行なわれるし，本庁の勤務になったり，県庁へ出向させられる場合もあります。

レンジャーの仕事は，地元の有志を組織して公園内のゴミ処理をするといったじみな仕事が多く，シーズン中は日曜も祭日もありません。建築申請などの書類を処理するデスク・ワークが大半で，公園内を歩くのは月にせいぜい数回。

「これはほんとうに好きでないと勤まりません。中学の段階で，方針を固めるのは早すぎると思うが，一応のコースとしては高校は普通科，大学は農学部の造園関係がいいでしょう。条件としては，まず自然科学に興味をもつこと。第2は健康です。そして，自然保護に対する強い意欲の持主ということになりますね」

と，環境庁の自然保護局ではいっています。

自然保護に関する仕事の分野は今後は広くなると思われますが，現状は以上のようです。東京農工大学のように，「環境保護学科」の新設を申請している大学もあるので，将来は新しい進路も開けてくると思われます。■　（編集部）



ナイロビの郊外にある
ケニア国立自然動物園

裏表紙説明

カナダヅル　6つの亜種に分けられ，その名のとおりカナダやアメリカにすんでいるが，一部はシベリア東端やキューバでも繁殖する。

成鳥は本来，やや青みのある灰色だが，春から夏にはレンガ色に〝変身〟するものもある。これは，くちばしで酸化鉄などを含む地面をつついたあと羽づくろいをするためで，土地により色変りのツルが現われるという。

キューバにいる亜種はかわいたところに営巣するが，ふつうは湿原やツンドラ地帯に，平均40～60ヘクタールほどのなわ張りをつくる。

多くはアラスカやカナダ北部からメキシコまでの範囲内を移動するが，フロリダとキューバの亜種は渡りをしない。この点はタンチョウ（大陸のものは渡りをするが，北海道のものは定住する）とひきくらべ，興味深い。

冬は群れをつくり，かなりの個体数が見られるものの，渡りをしない亜種は数が少なく，保護が問題となっている。

日本にも，これまで数回飛来した記録がある。■　（正富宏之）

撮影　G. W.アーチボールド

▶訂正　79号「表紙」ヒガラ──→ハシブトガラ

次号予告

10月25日発売



オオオオハシ

世界動物百科 85号 11／5

カラーページ

キツツキ目
- キリハシ科
  - ミドリオキリハシ
- オオガシラ科
- ゴシキドリ科
  - ムネアカゴシキドリ
- ミツオシエ科
  - ノドグロミツオシエ
- オオハシ科
  - アカオビチュウハシ
  - オオオオハシ

私たちの仲間

ニッポン列島探鳥記 7

『小笠原』――しのびよる〝観光公害〟の影 編 集 部

再び冬眠室へ
ヒグマと２人のイノシシ 81 畑 正憲

キツツキ類のあしゆび(上)
カラーページ解説 浦本昌紀

空飛ぶ鳥のメカニズム
1 鳥と飛行機 吉良幸世

漢字のふるさと 61
鳶(とび・とんび) 藤堂明保

第65号～第128号(鳥類)のおもな内容

◉ 数字は号数，白ぬき数字は既刊

第１号～第64号(概説・哺乳類)のおもな内容

本誌の購読について

本誌は，全国の書店，朝日新聞販売店で取り扱っております。

毎週定期的に，配達をご希望されるかたは，お近くの，取扱店にお申込み下さい。

なお，本社直接購入のご希望のかたは，下記あてお申込みを願います。送料は，１部につき30円です。

朝日新聞東京本社出版業務部
東京都千代田区有楽町２－３ 〒100
TEL. 03―212―0131
朝日新聞大阪本社出版業務部
大阪市北区中之島３－３ 〒530
TEL. 06―231―0131
朝日新聞西部本社販売部出版業務課
北九州市小倉区砂津1―12―1 〒802
TEL. 093―531―1131
朝日新聞名古屋本社販売部出版業務係
名古屋市中区栄1―3―3 〒460
TEL. 052―231―8131

世界動物百科 通巻84号 昭和47年10月29日発行(毎日曜日発行) 編集・発行人 大田信男 発行所 **朝日新聞社** 東京 大阪 北九州 名古屋 印刷・凸版印刷 **定価220円**



カナダヅル　説明 30ページ

雑誌　0635－10／29